



特集	03
東日本大震災	
1. 学会関連機関の被災状況について	
2. 会長声明	
寄稿	05
海洋表層力学に関する O.M.Phillips 博士の貢献	
書評	07
海のブラックバス サキグロタマツメタ	
情報	09
1. 集会などの報告	
2. 公募等 一般財団法人キャノン財団	
学会記事	11
1. 2011年度日本海洋学会秋季大会開催通知	
2. 議事録等	
会告	16
三賞・環境賞推薦依頼	

ごあいさつ

「JOSニュースレター」発刊に寄せて

学会長 花輪 公雄

本年（2011年）3月11日（金）、マグニチュード9.0の我が国観測史上最大の地震「東北太平洋沖地震」が起きました。この地震の揺れそのものによる被害や励起された巨大津波による被害、そして制御を失った福島第一原子力発電所からの放射能漏れによる被害が重なり、未曾有の大惨事となりました。この一連の災害は「東日本大震災」と命名されました。多くの方が被災し、死者・行方不明者も最終的に3万人を超えるとも言われております。この震災でお亡くなりになられた方のご冥福をお祈りするとともに、被災地の一刻も早い復旧と復興を祈念いたします。

このような状況の中で2011年度の本学会活動がスタートいたしました。3月22日から26日までの5日間、東京大学大気海洋研究所に所属する会員のお世話で、春季大会が開催される予定でしたが、中止することといたしました。このため、多くの会員にご迷惑とご心配をおかけしたことをお詫び申し上げます。

さて、2011年は本学会にとって特別な年であります。まず、本学会の設立は1941年（昭和16年）であり、本年は70周年目の年であることです。このため、福岡地区で開催される秋季大会では、学会の70年の歩みを振り返り、今後発展すべき方向性を議論するシンポジウムを開催いたします。また、年度末には、このシンポジウムの報告を含め、50周年や60周年のときの「海の研究」と同様の記念冊子を発行する予定です。

次に、本学会が発行する英文機関誌「Journal of Oceanography (JO)」と和文機関誌「海の研究」の完全電子ジャーナル化が行われたことです。学術雑誌の電子ジャーナル化は、世界的な趨勢でもありますし、また、機関誌のプレゼンスとヴィジビリティ（いわゆる「見える化」）の向上に資するものと判断しております。また、これを機会に、和文誌「海の研究」は、レビュー・プロセスを経た論文と総説のみを掲載することといたしました。

そのため、従来は「海の研究」に掲載していたさまざまな情報を、会員の皆様に直接お届けするニュースレターを発行することとし、ニュースレター編集委員会（初代委員長は岩坂直人会員、東京海洋大学）を立ち上げました。今回、お届けするこの号が、その第1巻第1号となります。

ニュースレターは、当面は年4回の発行といたしますが、軌道に乗りましたら年6回、あるいはそれ以上の発行を目指すこととしております。内容も、当初は「海の研究」掲載の情報等が主要部分を占めることとなりますが、様々なアイデアのもとで拡充するつもりです。会員が知りたい情報を、迅速に提供できるようにすることが、このニュースレターの目標です。

最後に会員の皆様にお願ひですが、魅力的な「JOSニュースレター」となるようご意見、ご批判、ご提案をお寄せ下さるようお願い申し上げます。是非、このニュースレターを育ててください。以上、ニュースレター発刊に当たっての学会長の挨拶といたします。



海の研究編集委員長就任にあたって

久保田 雅久(東海大学)

本年度から日本海洋学会の和文誌「海の研究」の編集委員長をお引き受けすることになりました。日本海洋学会誌は1992年から英文誌と和文誌に分離され現在に至っております。海の研究の初代編集委員長は福岡先生で、私は7代目の編集委員長になります。私は1994年から2003年まで9年間海の研究の編集委員を務めさせて頂きました。最初の頃の編集には、シルバー人材の活用ということで、定年後の多くの方々が編集委員に含まれていて、実際の編集作業に大きな貢献をして頂きました。久しぶりに海の研究の編集に携わることになり、自分も頭髪だけではなく、実質的にシルバー人材の仲間に加わったのかと感慨深いものがあります。さて、最初に編集委員長のお話を頂いたときに、私がすぐに考えたことは、もっと多くの読者にとって興味のある雑誌に出来ないかということでした。例えば、日本気象学会では同じような和文誌として「天気」を発行しておりますが、「天気」と比べて、「海の研究」の内容は幅が狭いように感じるとともに、そこをもっと改善すれば、読者数の拡大につながるのでは無いかと常々考えておりました。また、アメリカ気象学会誌の1つである Bulletin of American Meteorological Society(BAMS)は海洋学会の海の研究に対応する雑誌と考えられますが、そのインパクトファクターは気象の分野ではトップクラスで、アメリカ気象学会の多くのジャーナルの中でも1,2を争うほどです。これは、その掲載内容のカバーする範囲が広くて、一般の読者の多様な興味に対応しているからでは無いかと思います。そこで、私は、海の研究をこういった雑誌と同じように、研究者だけではなく一般の方々も含む、もっと多くの人たちにとって魅力的な雑誌にすることが、海洋学会にとって非常に重要であると考えていました。そして、それをしないと海洋学会の将来は危ういのではないかと危惧しておりました。ところが、皆様もご存じのように本年度から海の研究のかんりの部分はニュースレターに移行し、海の研究は単純に和文論文のみを掲載することに決まりました。私が編集委員長に就任したのは、既にこのような区分が決定された後ではありますが、これは私が感じていたのと同じような危機感からの変更だと伺ってお

ります。ですから、私が当初意図していたことは、ニュースレターによって実行されるのだらうと期待しているところです。一方、和文論文のみを掲載することになった海の研究に将来はあるのでしょうか？和文誌にインパクトファクターが付くことはほとんどありえないでしょうから、インパクトファクターなどによる最近の研究評価の実態は、和文論文誌にとっては非常に厳しい状況につながることは疑いありません。事実、私自身も編集委員長の依頼をお受けするかどうかで一番悩んだのは、自分自身が和文誌の存在価値をそれほど認めていないということの整合性でした。しかしながら、世の中にはいろいろな立場、あるいは考え方の研究者がいらっしゃることや、その中には和文誌に投稿することの意義が十分ある研究者も多いこと、そして、そういった多くの方々に対する配慮を忘れないで編集を行うことによって、初めて海の研究の存在価値は高まり多くの方々へ投稿して頂けるのでは無いかと考え始めました。また、書き手にとってだけではなく、読み手にとっても魅力ある雑誌を構築する必要があります。例えば、日本気象学会の気象研究ノートのような、ある研究テーマについてまとめたような媒体は、多くの読者にとって非常に有用であると思われまます。また、私の恩師の吉田先生が、常々、学問の発展が加速度的に進む時代での総説論文の重要性を強調されていたことが思い出されます。そこで、気象研究ノートのような媒体を持たない海洋学会にとって、海の研究に総説論文を積極的に掲載することの重要性は非常に大きいと思われまます。今後はこちらから積極的に総説論文の依頼を会員の皆様にさせて頂くかもしれませんが、そのときには快くお引き受け下さるようお願い申し上げます。簡単に言えば、読み手にとっても書き手にとっても魅力のある雑誌を作ることが、私、そして編集委員会の使命であろうと考えております。ただ、具体的にどのようにして、海の研究の存在価値を高めるかということについては、編集委員会にとっての今後の課題だと考えております。また、それには海洋学会員の皆様のご協力が必要不可欠ですので、今後も一層のご支援を賜りますよう、何とぞ宜しくお願い申し上げます。

Journal of Oceanography の新編集委員長に就任して

日比谷 紀之(東京大学)

2011年4月1日より、海洋研究開発機構の才野 敏郎 前編集委員長の後任として Journal of Oceanography (JO) の編集委員長に就任致しました。この場をお借りして、JOの国際的評価を大いに高めることに尽力された 才野 前編集委員長をはじめとする前 JO 編集委員メンバーの皆様に、心からの敬意と謝意を表します。

JOのウェブサイトにおいて、すでに発表させて頂いておりますが、2011年4月1日から、オンライン論文投稿システム Editorial Manager® を導入しております。このオンラインシステムの導入により、投稿された原稿は自動的に PDF フォーマットへ変換され、特殊文字を含んだ様々なファイル型式による論文投稿にも対応できるようになりました。論文査読はオンラインで行われ、投稿後の論文の審査過程もインターネット上でモニターすることが可能です。今後の論文投稿に際しましては、この Editorial Manager® をご使用頂

けるよう、お願い致します。オンライン論文投稿の方法については、JOのウェブサイト <http://www.springer.com/10872> においてご確認頂けます。オンライン論文投稿システム Editorial Manager® の導入は、論文審査はもとより、論文出版の迅速化に大いに寄与するものと確信しております。

なお、4月1日からは、JOの投稿分野に関して、以下のような変更を加えました。

- (1)「海洋生物学」と「微生物学」は、「海洋生物学:底生生物」、「海洋生物学:プランクトン および ネクトン (遊泳生物)」、「海洋生物学:バクテリア および アーキア (古細菌)」の3項目に分類。
- (2)「海洋物理学:リモートセンシング、風波」は「海洋物理学:リモートセンシング」、「海洋物理学:風波、実験」の2項目に分類。

これらは、いずれも、当該研究分野での論文投稿数の急速な伸び

に対応した処置です。

今後、JOの一層のレベルアップを図るため、諸外国の著名研究者の何名かの方々に新編集部へ加わって頂く予定になっております。編集部の新メンバーは5月中頃までには確定できる見込みです。

JOには掲載料不要という大きな利点があります。研究者の皆様、

特に、若手研究者や大学院生の方々には、是非、興味深い論文をJOに投稿して頂ければと思います。微力ながら、新編集委員長としてJOのさらなるレベルアップに貢献するため、最大限の努力を尽くす所存でおりますので、何卒、皆様の変わらぬご支援をお願い申し上げます。

特集：東日本大震災

特集

学会関連機関の被災状況について

副会長 津田 敦

このたびの大地震、またそれに引き続く津波により、多くの方が犠牲になり、また太平洋沿岸は壊滅的な被害を受けました。多くの尊い命が奪われ、甚大な被害が生じたことに、心より哀悼の意を表し、被災された方々にお見舞いを申し上げます。

被災の規模が大きい岩手、宮城、福島3県には計67名の会員が15の機関に在籍しています。いまのところ会員の人的な被害はないと聞いています。主な機関の被災状況を伝聞によりまとめると以下のようになります。

・東京大学大気海洋研究所国際沿岸研究センター

職員・学生に人的な被害はないが、研究棟3Fまで浸水しており、すべての計測機器、船舶は流出または使用不可。倉庫および観測機器は流出。学生はすべて柏キャンパスに移動、大槌には仮事務所を計画中。

・北里大学三陸キャンパス

学会員に人的な被害はないが、現在も学生が1名行方不明。建物の損傷はひどく、機器、器具も床に散乱するような状況で、授業等を行える状況ではないため、今後4年間は相模原で授業を行う予定。

・石巻専修大学

建物の損傷はひどくなく大学としての機能を保っていると聞く。会員の無事は確認できたが、学生には犠牲者があったと聞く。また、引き続き停電で、保存冷凍試料などは使用できない状態。

・東北区水産研究所

職員は全員無事で、塩釜の本所と八戸支所においては、建物の損

傷もほとんど無しであるが、宮古の施設は全壊。若鷹丸は船底に損傷を受けた可能性があり調査中。冷凍試料等は停電により全滅。

・宮城県水産技術総合センター

研究職員は全員無事であるが、船舶職員に死亡および行方不明者がでている。本所は1階部分の浸水だが、施設によっては壊滅状態。

・東北大学

理学研究科、農学研究科に所属する本学会の会員は、教職員、学生とも全員無事。研究室が入っている建物には大きな損傷があるが、補修後は今後も使用可能。実験設備も大きな損傷を被っていると思われるが、詳細は今後の調査要。

以上の情報は電話での話や、伝聞およびHP上の情報をもとにまとめたものです。まだ確実な情報ではなく、若干の間違ひもあるかもしれません。とりあえず、会員に大きな人的な被害がなかったことに安堵しましたが、ご親族のご不孝という話も聞きました。東北地方太平洋沿岸で一万人以上の死亡者、一万人以上の行方不明者が出ている現状を考えると、会員に人的な被害がなかったことを、素直には喜ばません。施設や都市機能といったものに想像を絶する被害があったことを実感します。日本海洋学会は海洋学の進歩普及を図ることを目的に設立された学会ですが、今回の災害を目の当たりにし、学会としても、被災地および海洋関連施設の復興に果たす役割を考えていく所存です。

(編集委員長註：上記の状況は4月11日現在のものです)

特集

日本海洋学会における東日本大震災および福島第一原子力発電所事故対応

(会長声明・声明前文)

学会員の多くの皆様は、空前の被害をもたらしている東日本大震災から日本が立ち直るため、科学、とくに海洋学に携わる者ができることは何か、という問いを考え続けているのではないのでしょうか。2011年4月14日、この問いをテーマとし、海洋学会員有志を中心とした「震災にともなう海洋汚染に関する相談会」が、東京大学理学部1号館で開催されました。相談会では、原発事故に続く海洋汚染の観測やシミュレーション予測結果などについて報告がなされ、今後もこうした活動や情報の発信が必要という認識で、100名に及ぶ参加者の同意が得られました。翌15日に開催された学会幹事会でもこのような認識は支持され、「震災対応ワーキンググループ」が

設置されることとなりました。このワーキンググループは今後、学会内の各研究会とも協力しながら、震災対応の調査研究と社会に向けた情報発信に関わっていくこととなります。このたび、その決意を学会全体で共有し、また広く社会に伝えるため、学会長声明の発表も行うこととなりました。ここにその全文を掲載します。今回の震災に関しては、日本学術会議や地球惑星科学連合などが声明や提言などの形で対応に取り組む姿勢を表明しています。ここに示す声明が、こうした関連組織や社会とのいっそうの連携につながり、今後の復旧と復興に向けた活動に資することを願うものです。

東日本大震災と原発事故に関する日本海洋学会の活動について(会長声明)

日本海洋学会 会長 花輪 公雄

2011年3月11日、マグニチュード9.0の「東北地方太平洋沖地震」により発生した巨大津波は、東日本の太平洋岸を襲い、多くの人命を奪うとともに、住居など多くの建物を破壊し、生活基盤と生産基盤を一挙に奪い去りました。日本海洋学会は、亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈りするとともに、被災地の一日も早い復興を願ってやみません。

今回の大震災では、地震の揺れと津波の襲来により福島第一原子力発電所が制御不能の事態となり、大量の放射性物質が大気と海洋に放出されたことが分かってきました。その量は、国際原子力事象評価尺度の最高レベルである「レベル7」と認定されるように、過去最悪の規模に達する恐れがあります。現在、放射性物質の大気や海洋への流出と拡散に関する観測と監視、そして数値モデルによる予測は、政府機関を中心として行われ公表されていますが、現状把握においても予測においても今後の一層の改善と継続的な取り組みが望まれます。

さらに、震災による人的、物的被害とともに、水産業の基盤をな

す沿岸生態系の破壊や、干潟や砂浜域の流出、そして大型藻類や底生生物の流出などが同時に起こっていると想像されますが、その実態は全くと言ってよいほど分かっておりません。

日本海洋学会は、海洋科学の振興を目的として1941年に設立された学術団体です。本学会は上記の認識に立ち、学会の総力を結集し、海洋環境の現状把握と将来予測に関して、情報の収集とその発信、そして提言や調査研究計画の組織化を通じて、震災対応に取り組む社会への貢献を目指すことをここに宣言いたします。同時に、専門外の会員および非会員の皆様にもなるべく分かりやすく、かつ、なるべく多くの情報を発信することを心がける所存です。

今回、本学会は、学会長を含む幹事会構成メンバー全員と各分野の専門家による「震災対応ワーキンググループ」を設置しました。今後はこのワーキンググループを核として迅速な対応をすることとしております。会員の皆様におかれましても、海洋学会を見守っていただいている非会員の皆様におかれましても、ご支援とご協力のほどお願い申し上げます。

特集

「震災にともなう海洋汚染に関する相談会(4月14日開催)」からの提言

相談会発起人 池田 元美、植松 光夫、蒲生 俊敬、田中 教幸、谷口 旭、山形 俊男

同相談会参加者は以下の方針を確認し、海洋学会の総意として取り組むように提案する。また早急に具体活動を開始し、海洋学会を通じて様々な協力を、自らも含めた海洋科学専門家に求める。さらに学術会議 SCOR 分科会などを通じて他の海洋科学関係学会にも働きかける。

方針

○大気、陸水、土壌、農学、水産など関連分野の専門家・学会と連携し、海洋科学専門家の英知を世界から広く結集することによって海洋汚染の実態を把握し、予測精度の向上に貢献する。

○原子力工学専門家と協力し海洋への放出過程と量を把握するとともに、放射線防護の専門家による生態系と人体への影響評価に資する情報を提供する。

○生態系を含めた海洋中の放射性核種について、海水中と海底堆積物での鉛直構造にも注目し空間分布や物質循環の時系列変化を求める。海域は沿岸陸棚、黒潮親潮混合域、それ以遠に分割し、現場観測とモデルを組み合わせることによって、時空間変動を求める。

○リスク・アセスメントに必要な情報を提供し、規制や制度改革など、市民の判断も含めた政策決定プロセスに資する。市民に対し、正しい情報を理解できる言葉で語り、また論理的思考に基づく判断を可能とする。

○津波などによる放射性元素以外の汚染物質の海洋流出、および生態系の攪乱と回復について、モニタリングを行う体制を整え、実態の把握と影響の推定を行う。

具体活動

観測体制

JAMSTECと大学による研究船を利用した観測と、水産庁、気象庁、海上保安庁などの現業観測を組み合わせ、最適な観測を行う。JAMSTECによる研究観測に収集、分析、解析の公募を入れる。大学中心の観測は、参画メンバーが合意の上、既存計画の一部を変更してシフトタイムを確保し、観測航海を実施する。コミュニティとしての計画を立てるとともに、観測計画を調整する組織を立ち上げ、広く周知する。

各大学の練習船等も利用して、観測体制を充実するように提言する。また、収集した海洋試料について、放射能測定を速やかに行うため測定グループとの連携を確保する。

モデリング

沿岸域(10~30km幅)モデルと中規模渦を解像できる近海域モデルをネスティングし、放射性元素放出源の情報をインプットする。データ同化を用いて海洋観測データと放出源に整合する場を構築する。モデリング研究に関する連絡会を継続的に開く。

他分野との連携

原子力工学専門家と協力し、可能性の高いシナリオ、最悪シナリオなど想定し、放出量の時系列を得るとともに、大気・陸水学専門家と協力し放射性元素の海洋流入を推定することによって、海洋環境への影響を把握し、予測精度を高める。

プロジェクト立案

大災害に伴う研究プロジェクトの立案に協力するとともに、これからの計画立案やプロジェクト申請の機会には敏速に対応できるように、情報収集と海洋科学専門家のネットワーク活性化に努める。

情報提供・開示

新たな情報を提供・開示することに加え、既存の情報も整理、評価し開示する。リスク・アセスメントに必要な情報には確度を付けて開示する。開示する情報を相互検証し、広くアクセスできるシステムを用いて、多くの人々が理解できる論理的な解説を付け、ま

たわかりやすい可視化に心がけて公表する。市民に対するQ & Aや、他の有益な情報源へのリンクなど、海洋学会と市民の交流を活性化。有用な場合は英語による情報発信を行う。

研究の進行を報告し、得られた知見を広く開示するため、シンポジウムやワークショップを滞りなく開催する。

学会長からの回答書:「震災にともなう海洋汚染に関する相談会」発起人の皆様(池田 元美, 植松 光夫, 蒲生 俊敬, 田中 教幸, 谷口 旭, 山形 俊男の各会員)

会長 花輪 公雄

提言書、受領いたしました。4月14日(木)開催の相談会の議論に基づいた海洋汚染に関する多くの提言、とりわけ福島第一原子力発電所の事故による放射性物質で汚染された水の海洋流出に関する件に関しては、大変重く受け止めております。本学会幹事会は、提言の内容を実現できるよう、最大限努力する所存です。

以下、この場をお借りして学会幹事会を中心としたこの間の動きについて概要をお知らせいたします。

4月14日の相談会には幹事会メンバーも参加しており、翌15日に開催された幹事会で会の報告がなされました。その後、学会は震災にどう対応すべきかの議論を行い、「震災対応ワーキンググループ(WG)」の設置を行うこととしました。このWGでは、学会の英知を集め、とりわけ放射性物質で汚染された水の海洋での挙動の実態を明らかにすること、モデリングにより分布の状態を再現し将来予測をすること、情報を分かりやすく社会へ伝達すること、などの項目について提言や企画調整作業をすることとしました。また、WGのメンバーシップは、当面幹事会全員と相談会に参加された会員、

そして本件に関し積極的に貢献してくれる会員・非会員の中から選ぶこととしました。そして、4月22日には第1回WGが開催され、幾つかのサブグループを作り、早速活動に移しております。

放射性物質を含む水の海洋での分布を知ることはもっとも重要なことです。そのため、放射性物質の移流・拡散過程をとらえる必要があります。また、これらは正確なモデリングを行うためにも必須です。このような観点から、現在のモニタリングで十分かどうか、不十分ならどのようなものが望ましいのか、現在サブグループ内で活発な議論が行われていることを紹介しておきます。なお、この提言は、間もなく公表される予定です。

既に学会長名で声明を出しておりますように、私たちは学会総力を挙げてこの難局に対応するつもりです。学会員の皆さま方のご理解とご協力を頂ければ幸いです。

(編集委員長註: 具体的な対応などは学会の「東日本大震災関連特設サイト」をご覧ください。)

寄稿

寄稿

海洋表層力学に関するO. M. Phillips博士の貢献

九州大学名誉教授 光易 恒

2010年10月13日、名著The Dynamics of the Upper Oceanの著者で、海洋波ならびに広く海洋表層の力学に関する世界的な研究者Owen Martin Phillips博士が79歳で亡くなった。Phillips博士は、1957年に、それまで手がつけられないほど困難と考えられていた風による海洋波の発生・発達機構に関する理論を、J. Milesと時期を同じくして発表し、それ以来、海洋波のスペクトル構造、海洋波の非線形相互作用、海洋表層の乱流などに関し、絶えず指導的な研究結果を発表し続けてきた。博士の多くの研究は、斬新な理論を中心としたものであるが、理論に加え理論の背後にある現象に対する明快な物理的考察が、その後の研究に対する指導的役割を高めたように思われる。

Phillips博士は、1930年にオーストラリアで生まれ、1952年にシドニー大学の応用数学科を最優秀な成績で卒業した後、ケンブリッジ大学の応用数学科に移った。1955年には剪断乱流に関する研究On shear flow turbulenceで同大学からPh. Dを得た。その後も乱流関係の流体力学的な研究を行っていたが、F. Ursellのセミナーにおいて、風による水面波の発生と云う極めて興味深い現象が全く解明されてい



図1 Merle夫人と一緒に九州訪問中のPhillips博士

ない事を知り、風で発生する海洋波の問題に研究の方向を転換した。

その後、1957年に米国に渡りJohns Hopkins大学の機械工学科に助教授として就任した。ちょうどこの時期、カリフォルニア大学のJ. W. Milesと時を同じくして、Journal of Fluid Mechanicsに発表した風波に

関する論文 (Phillips, 1957) は、風によって海洋波が発生し発達する極めて複雑な機構の一つの見通しを与えた画期的なもので、その後海洋波の発生・発達に関する研究は、この二人の研究を基にして展開した。

続いて 1958 年に、海洋波の周波数スペクトルの高周波領域が飽和して、周波数の -5 乗に比例すると云う、有名な「 -5 乗則」を提出した (Phillips, 1958)。これは、1973 年に鳥羽良明博士が提出した、高周波領域が周波数の -4 乗に比例すると云う結果 (Toba, 1973) が多くの支持を得るようになるまで、長期間にわたり波浪スペクトルに関する研究において、指導的役割を果たした。

その後、多くの観測結果が「 -4 乗則」を支持するようになってから、彼は、「 -5 乗則」を撤回し、「 -4 乗則」の物理的根拠を与える理論を 1985 年に発表した (Phillips, 1985)。この論文の序言の中で彼は次のように述べている：

The matter clearly demands reconsideration — 25 years is a pretty good life time for the simple ideas underlying (1.1) and (1.2), and if they are found to be no longer viable, they should be saluted and interred with dignity.

いかにも博士らしい表現である。(なお、上記の文章で (1.2) は、有名な、風波の周波数スペクトルの高周波領域が周波数の -5 乗に比例する式、(1.1) は周波数スペクトル (1.2) に対応する波数スペクトルの高波数領域が波数の -4 乗に比例する式である。)

1961 年、ドイツの K. Hasselmann と時を同じくして、水面波の非線形相互作用に関する画期的な理論を発表した (Phillips, 1961)。彼の回想 (Phillips, 1981) によると、この研究は、乱流における非線形エネルギー伝達にヒントを得て考え出したものの様で、当時彼が在籍したケンブリッジ大学には、流体力学の巨人 G. I. Taylor がまだ健在であり、G. K. Batchelor, A. A. Townsend, J. Proudman など、乱流研究の最前線で活躍している人達が居たことも背景にあるようだ。この研究は、当初は順調には受け入れられず、後述する Easton の会議においては、一人の研究者から強い批判を受けたようである。しかし、その後の K. Hasselmann らの精力的な研究、Longuet-Higgins を初めとする多くの理論家の研究などによって、水面波の非線形相互作用は海洋波の変動を支配する主要な機構の一つである事が明らかになった。

この研究に関連して興味ある事の一つは、Phillips と Hasselmann が、研究の当初においてお互いの研究を全く知らなかった事である。Phillips は回想の中で、Sir George Deacon が 1961 年に開催した Easton (Maryland) の研究集会において、初めて Hasselmann に会って、彼が同じ方向に非常に一般性をもった研究を進めている事を知ったと述べている。このような事は、絶えず研究集会が開かれ、情報伝達が進んだ現在では考えられない事である。なお、この会議で発表された研究内容は、それに対する詳細な議論と共に、Ocean Wave Spectra と云う書名で 1963 年に Prentice-Hall から発行され、その後の波浪研究の展開に大きく影響した。

1974 年に M. Banner と共同で行った、うねりと風波の相互作用に関する研究も興味深い (Phillips & Banner, 1974)。この研究が発表される 8 年ほど前、筆者 (Mitsuyasu, 1966) は、風で風波が発生している海域に、風と同じ方向に進むうねりが入ってくると、うねりの波高が大きい場



図2 Johns Hopkins 大学の研究室における Phillips 博士

合には、風波が急速に減衰する奇妙な現象を水槽実験で発見した。しかしながら、うねりによる風波の減衰機構に関しては、はっきりしたことが分からなかった。Phillips 等は、実験でほとんど同じ結果を得ると共に、その現象を説明する明快な理論を提出した。

この機構は、うねりと風波が同一方向に進む場合には、かなり良く現象を説明するが、うねりと風波が逆行する場合には、必ずしも現象に合わない。それが、この機構の不備によるものか、あるいは、さらに強力な別の機構が作用しているかは、現在の所明らかでなく、今後の研究課題の一つと考えられる。

筆者が、Phillips 博士に初めて会ったのは、彼が上記の研究を行っていた 1974 年、オーストラリアのメルボルンで開かれた IAPSO/IAMAP の会議においてである。中世の修道僧を連想させるような風貌、明快ながら行き届いた気遣いを感じさせる話し方、その礼儀正しく暖かい人柄などに魅了された。その時の話題は当然ながら、風波とうねりの相互作用の問題に集中した。それ以来、多くの機会に博士に接しているが、現象に対する深い洞察力と、暖かい人柄には感服している。彼のもとで薫陶を受けた多くの若い研究者が、世界で活躍している理由が分かるような気がする。なお我が国では、元茨城大学教授の加藤始博士ならびに元広島工業大学教授の水野信二郎博士がそれぞれ Phillips 博士の研究室で過ごされた事が有る。

以上、Phillips 博士の代表的な研究のごく一部について触れ、彼の海洋学とくに海洋波の力学に対する偉大な貢献について述べた。彼の輝かしい研究業績、中でも海洋表層における波動および乱流、特に海洋波の発生理論に対しては、1975 年に米国気象学会より Sverdrup Gold Medal が与えられた。また、彼の名著 The Dynamics of the Upper Ocean の第 1 版に対しては、1965 年に Royal Society of London から Adams Prize が贈られた。

この度、世界の波浪研究を先導してきた偉大な研究者の一人 O. M. Phillips 博士の逝去の報に接し、筆者には海洋波の研究における一つの時代が過ぎ去りつつあるとの感が深い。海洋学に対する博士の偉大な貢献を回想し敬意を表しながらこの稿をおえる。



図3 1978年にフランスのBendor島で開かれたNATO Conferenceにて
左から、H. Lacombe (仏)、K. Hasselmann (独)、O. M. Phillips (米)、E. Mollo-Christensen (米) M.S. Longuet-Higgins (英) A. Favre (仏)

文献

- Phillips, O. M. (1957): On the generation of waves by turbulent wind. *J. Fluid Mech.*, **2**, 417-445.
- Phillips, O. M. (1958): The equilibrium range in the spectrum of wind-generated waves. *J. Fluid Mech.*, **4**, 426-434.
- Phillips, O. M. (1961): On the dynamics of unsteady gravity waves of finite amplitude. *J. Fluid Mech.*, **11**, 143-155.
- Phillips, O. M. (1966): *The Dynamics of the Upper Ocean*, 1st edition, Cambridge Univ. Press, pp 261. (2nd edition in 1977, 336pp)
- Phillips, O. M. and Banner, L. M. (1974): Wave breaking in the presence of wind drift and swell. *J. Fluid Mech.*, **66**, 625-640.
- Phillips, O. M. (1981): Wave interactions – the evolution of an idea. *J. Fluid Mech.*, **106**, 215-227.
- Phillips, O. M. (1985): Spectral and statistical properties of the equilibrium range in wind-generated gravity waves. *J. Fluid Mech.*, **156**, 505-531.
-
- Mitsuyasu, H. (1966): Interactions between water waves and wind (1). *Rep. Res. Inst. Appl. Mech.*, Kyushu Univ. **14**, 67-88.
- Toba, Y. (1973): Local balance in the air-sea boundary processes, III, on the spectrum of wind waves. *J. Oceanogr. Soc. Japan*, **29**, 209-220.
- (文献としては、本文に関連したもののみを挙げた)

書評

海のブラックバス サキグロタマツメタ

大越健嗣・大越和加 編

恒星社厚生閣、2011年発刊、225ページ、3,200円+税、ISBN978-4-7699-1234-7

関口 秀夫(三重大学)

サキグロタマツメタ *Euspira fortunei* は軟体動物門腹足綱のタマガイ科の種であり、泥・砂泥底の干潟とそれに隣接する潮下帯に生息し、アサリなどの貝殻に穿孔してその軟体部を食する捕食性・貝類食性の巻貝である。本邦では有明海と瀬戸内海に、国外では中国大陸や朝鮮半島の沿岸域にかけて分布していた。一見タニシ形をした本種は殻高5cmほどの巻貝であり、数年前まで水産の現場にも一般にもほとんど知られていなかったが、現在では日本各地に分布を広げ、あちこちでアサリへの食害が問題となっている。

本邦ではサキグロタマツメタは絶滅寸前とされていた。しかし、中国・北朝鮮からの輸入アサリに混入した外来個体に由来すると推測されているが、1970年代以降に伊勢・三河湾、浜名湖、さらには1990年代以降には東京湾や東北地方にも、本種は分布を広げてきた。つまり、サキグロタマツメタは国内の絶滅危惧種と外来種の2つの顔をもつ点で、他の多くの外来種とは異なった特異な巻貝である。

話を混乱させないために、外来生物の定義を明確にしておこう。外来生物は種という単位に限定されず、次の(i)-(iv)の4種類の外来生物に分けられている。(i) 国外起源の外来種：本邦では非在来種、(ii) 国外起源の外来個体：本邦の在来種でもあるが、国外にも分布しており、国外から国内に移入してきた外来個体、(iii) 国内起源の外来種：国内の特定の地

域(水域)に限って分布していたが、他の地域に移入していった種、(iv) 国内起源の外来個体：集団遺伝的・生態的に異なった複数の地域個体群があり、特定の地域個体群の個体が他の個体群の地域(水域)へ移入していった個体。本書では、分布を広げていった東京湾や東北地域のサキグロタマツメタは、「国外起源の外来個体」であると見なされている。

水産の現場関係者や研究者に、さらには外来種に関心のある一般の人々を対象に、本書が扱っているのは、サキグロタマツメタの水産現場での問題の経緯・現状・展望、その生物学的特性、外来種としての本種に関する知見を集積・整理し、これを踏まえて、生物を人為的に大量に移動させることの問題点、経済と環境・生物多様性との係わりである。本書は複数の執筆者による4編10章から構成され、目次は次のようになっている。

第1編 サキグロタマツメタとは？

第1章 絶滅寸前、外来移入、食害—3つの顔をもつ貝(大越, 29pp)

第2編 サキグロタマツメタの生物学

第2章 サキグロタマツメタの解剖(土屋・竹山, 10pp)

第3章 サキグロタマツメタの遺伝子解析(浜口, 5pp)

第4章 成熟と産卵、初期発生と成長(大越・山内, 37pp)

第5章 捕食・穿孔行動（大越・大越, 28pp）

第6章 フローティング, 移動, 捕食・被食関係（大越, 16pp）

第3編 サキグロタマツメタの水産学と環境学

第7章 食害防除・駆除対策（須藤, 22pp）

第8章 水産動物の移動に紛れて分布を拡大する生物たち（大越, 20pp）

第4編 外来生物問題の深層

第9章 サキグロタマツメタをめぐる法律と国際問題（岩崎, 20pp）

第10章 サキグロタマツメタが問いかけるもの（大越, 12pp）

本書を手にとる多くの読者の関心は、複数の研究領域（生態学とくに保全生態学、環境学、水産学、沿岸海洋学）が交差する外来種問題の領域に向くであろうし、本書の狙いもそこにあるが、その意味で次の(1)-(6)のような問題に注目するであろう。これらの問題に本書はどのように答えているのであろうか。

(1) サキグロタマツメタの移入経路および(2) サキグロタマツメタの在来個体と外来個体の関係：「大量の輸入アサリへのサキグロタマツメタの混入」、「これらの輸入アサリの国内各地での種苗放流」、「サキグロタマツメタの分布は有明海と瀬戸内海に限定されていたが、現在は国内各地に分布を広げ、そこで爆発的に増えている」、これらの事実は強力な状況証拠であり無視はできない。しかし、DNA・分子マーカによる集団遺伝学的な証拠に乏しい現状では、これらの状況証拠のみでは、国内各地から報告されているサキグロタマツメタが「国外起源の外来個体」であるとは断定できない。

(3) サキグロタマツメタと近縁種あるいは捕食性・貝類食性の他種との関係：この問題については本書には言及がないが、次のように考えられる。タマガイ科の40種以上が本邦に生息しているが、私たちに馴染みのあるタマガイ類はタマツメタガイ *Euspira pila* とツメタガイ *Glossaulax didyma* であろう。これら2種も捕食性・貝類食性であり、本邦における地理分布もサキグロタマツメタと重複しているが、ここで問題になるアサリ食害には関与していない。

ツメタガイは本邦においては北海道南部に、国外ではインド・西太平洋から中国大陸・朝鮮半島にかけて分布し、潮間帯から水深50mまでの細砂底に生息しているが、どちらかといえば北海の影響の強い砂浜域に多く見られる。一方、タマツメタガイは本邦では太平洋側では鹿島灘に、日本海側では兵庫県以北から北海道南部、さらには千島やオホーツク海にかけて分布し、水深10-50mの砂泥底に生息する。つまり、これら3種のタマガイ類は、本邦内の地理分布は重複しても、大まかに見て生息場所が重複することはないので、競合関係にはない。しかし、いずれも捕食性・肉食性であるサキグロタマツメタ、キセワタガイ（軟体動物腹足綱）、マヒトデ（棘皮動物ヒトデ綱）の3種は、アサリをめぐる競合関係あるいは捕食-被食関係にあると推測されるが、よくわかっていない。

(4) サキグロタマツメタの分布拡大と個体群増大の要因：これらの問題に関しては本書での言及は少なく、輸入アサリの種苗放流を介しての分布拡大が主要因として挙げられている。しかし、これらの問題を解明するには、サキグロタマツメタ個体群の成立・維持・変動の機構に関する研究を必要とするが、残念ながら、これまで研究成果はほとんどない。仮にここで問題になっているサキグロタマツメタが「国外起源の外来個体」であるとすれば、ではその証拠は、「国内起源の外来種」でないという証拠は、どこにあるのかという問いに直面する。干潟・藻場の消失を含めて、近年、本邦の沿岸水域の環境が急速

に悪化してきたことは明白であり、これが1980年代後半から始まったアサリ漁獲量の激減の主要因のひとつである。これを念頭に置けば、沿岸水域でのサキグロタマツメタを含む多数の外来生物の出現と定着は、国内・国外からの外来種の導入努力量（散布体圧）の増大に加えて、受入れ先の環境変化（劣化）がなお一層の外来種の定着を促進している面も否定できないであろう、この方面の研究が望まれる。

(5) サキグロタマツメタによるアサリ食害の影響：本書に言及されている種々の証拠によって、サキグロタマツメタがアサリに食害を及ぼしていることは明らかである。問題は、この食害がアサリ資源の増減に影響を及ぼすほどの規模なのか否かである。本邦全体のアサリ資源の増減に関しては、結論あるいは合意は得られていないが、幼生加入過程を介しての環境悪化や過大な漁獲努力が主要因として挙げられている（関口・石井(2003): 海の研究 12: 21-36、松川ほか(2008): 日水誌 74: 137-143)。では、アサリ地域個体群の増減にサキグロタマツメタは関与しているのであろうか。松島湾の東名浜海岸や万石浦のアサリ資源の壊滅的な状況が数年間続いたが、状況証拠にもとづいて、この原因がサキグロタマツメタの食害に帰せられている。本当であろうか、本書に引用されている原著論文の検討からも、評者は懐疑的にならざるを得ない。

東名浜海岸のサキグロタマツメタのサイズ（殻高）頻度分布を年級群に分離した図4-22(p.77)は、いくつかの点で奇妙なデータである。卓越年級群が出現する場合を除けば、通常多くの例では、死亡過程が効いて年級群が古くなるとともに資源量が小さくなるが、この図はそうではなく、その傾向を打ち消すほどに、この地域のサキグロタマツメタの新規加入群の規模が年々著しく小さくなっていることを示唆している。この問題を明らかにするには、アサリとサキグロタマツメタそれぞれの資源の増減機構を解明する必要がある、具体的には、アサリ地域個体群の中の漁獲資源のアサリの増減を決定している成長段階、この成長段階の資源増減を決定している要因の特定である。

(6) サキグロタマツメタの生態系および生物多様性への影響：ここで問題になっているサキグロタマツメタが、「国内起源の外来種」あるいは「国外起源の外来個体」であろうと、導入先での本種の爆発的増加が生物多様性や生態系に大きな影響を及ぼすことは必至であろう。本書に明らかなように、この方面にも関心が向いているが、今後の展開に期待したい。

本書によって、サキグロタマツメタに関する知見を、また「国外起源の外来個体」としてのサキグロタマツメタを含めて、輸入アサリその他を介した外来種の国内への移入を防ぐ上で制度的・法的な整備が不十分な状況を知ることができる。外来種を含めて生物多様性への社会的な関心が高い現在、啓蒙的に有意義な内容を含んでいる本書の刊行は、時候を得たものである。一方で、“よい意味”で問題点の多い本書を読んでいる間、その内容が興味深いだけに、評者はフラストレーションが溜まるのを、それを抑えるのに苦労した。

サキグロタマツメタが「国外起源の外来個体」と「国内起源の外来種」のいずれであろうと、現場において実際に何が起きているのか、状況証拠も大事であろうが、「サキグロタマツメタの爆発的増加と分布拡大の機構の解明を目指した研究成果が乏しい」という現状への認識が、いまひとつ明確に本書から伝わってこない。その意味で、本書と併せて、外来種の「研究枠組み」とその研究成果の最近の進展を扱った総説論文（Simberloff (2009): *Annu. Rev. Ecol. Evol. Syst.* 40: 81-102)の一読を勧めたい。

(1) 集会などの報告

The 5th International Zooplankton Production Symposium “Population Connections, Community Dynamics, and Climate Variability” 参加報告

千葉早苗 独) 海洋研究開発機構 地球環境変動領域

〒238-0043 横浜市金沢区昭和町 3173-25 e-mail: chibas@jamstec.go.jp

3月14日～18日にチリーのプコン (Pucon) で開催された、第5回 International Zooplankton Production Symposium に参加したので、学会員の皆さんに向けて報告します。

(はじめに)

同シンポジウムは、動物プランクトン研究全般における科学的知見の公表と普及、さらなる進展を目指して、4年に一度 IOC, PICES, ICES 等の主催で開催されてきた。前回の広島大会がアジアにおける初めての開催であり、今回は南米における初開催となった。回を追うごとに参加者数、参加国数が増え、今回は40カ国より300人以上の研究者が参加した。直前に発生した震災の影響により、日本の研究者の多くが参加のキャンセルを余儀なくされたが、それでも基調講演を務めて下さった上真一氏をはじめ、学生3名を含む計7名が現地に到着し、来られなかった方の分も、それぞれが有意義な成果を得て帰国してくれたと信じる。

(女性研究者のパワー)

私は SSC の一員として、数年前から同シンポの運営に関わってきたが、個人的な感想として、今回は特に「女性の力」の台頭が目立ったことが喜ばしく思えた。PICES、ICES をそれぞれ代表するシンポジウムコンピーナーの両輪を、若手女性研究者 (J.Keister と D.Bonnet 両氏) が務めたのは5回の歴史の中で初めてであり、また私を含む SSC メンバーも半数が比較的キャリアの若い女性であった。さらにすべての参加者のうち女性研究者が約半数を占めた。この分野の研究をリードする、いわゆる Big Name は現在でも男性研究者が多くを占めるが、今回の会議を見る限り、近い将来は女性の貢献がより期待できると感じた。

(概要)

期間中は、気候変動、生物地球化学、食物連鎖、生活史、生理生態等に関するテーマの他、湧昇域、極域といった特定の海域の生態系に着目した9つのセッションが開催された他、酸性化、Individual Based Model、長期データの海域比較、分子生物学等のテーマに沿った5つのワークショップがあった。セッションの内容については、以下ウェブサイトを参照下さい。
http://www.pices.int/meetings/international_symposia/2011/zoop5/default.aspx

(研究の近年の潮流と将来展望)

クロージングセッションにおいて、同シンポの開催に第1回大会から関わってきた、R.Harris 氏により過去5回の大会を振り返った講演があり、以下に挙げる数十年間の動物プランクトン研究の進展と、将来の展望が端的に示され興味深かった。

1. 研究分野の多様化

第一回大会における発表内容は、摂餌や生活史、バイオマス分布などカイアシ類を中心とする特定種の生態に関するものが大半を占めていた



図1：シンポ会場の庭から Pucon の火山 Villarrica を望む (copy right: Aiko Tachibana)

が、近年の大会では、気候変動に関連した時系列解析、生物地球化学的視点に立った研究、モデルに基づく研究発表が増加し、研究の多様化が顕著となった。また、ゼラチナスプランクトンの生態に関する知見は近年飛躍的に進んだ。

2. 新たな観測/実験手法の開発

第一回大会終了後に将来の課題としてリコメンデーションされた、分子生物学的手法の応用、Video Plankton Recorder のようなハイテク現場観測機器の開発と普及、生態系モデルにもとづくプロセス解明等の多くが実現し、研究の多角的な発展を助けた。

3. 異なる分野間の協力

研究分野が多様化する一方で、異なる分野間の研究者のコミュニケーションの強化が重視されるようになった (例えばモデル研究者と生理生態学分野の研究者の共同作業)。

4. 迅速なデータ化とコミュニティにおけるデータの共有

近年特に、長期変動解析や生物地球化学的研究等、地球環境変動に関連する分野で、国際協力に基づく海域比較研究が必須となり、そのため分析結果の迅速なデータ化、データ共有のためのシステム構築が急速に進みつつある。この課題が、海洋学あるいは地球環境科学の分野で共通の潮流であることは言うまでもない。

(動物プランクトン時系列の地球規模比較：アップデート)

ここで、私自身が携わっている長期変動研究に関するトピックを報告させていただく。上記4「迅速なデータ化とコミュニティにおけるデータの共有」にも関して、今回のシンポジウムでも、ワークショップ3「Updates and comparisons of zooplankton time series」において、世界の各海域における動物プランクトンの時系列観測データに基づく海域比較研究の継続および推進のための、さらなる枠組みの構築について議論がなされた。「動物プランクトン時系列の地球規模比較」は、2003年に開催された第3回の同シンポジウムにおけるワークショップでキックオフされた課題である。その後 SCOR のワーキンググループ

の活動を通じて、海域比較研究が進み、予定より大幅に遅れてはいるものの、一連の成果が Progress in Oceanography の特集号として近々出版される見込みである。また、同ワーキンググループのアウトプットのひとつとして、各研究所（研究者）が有している時系列データをオンラインでアップロードし共通の様式で可視化するためのシステムを NOAA が開発し、2011 年 4 月より運用開始予定とのこと。

(終わりに)

本シンポジウム開催の約 1 年前にチリーで津波の災害があり、ローカルオーガナイザーの Concepcion 大学が大きな被害を被った。

一時はシンポのスムーズな運営／開催が危ぶまれたが、同大学の R. Escribano 氏ほか多数の尽力のおかげで、サイエンスはもちろんのこと、他の面においても大変充実した会議になった。ここに改めて感謝の意を表したい。一方奇しくもシンポ数日前に日本を襲った地震／津波の災害により自然の脅威を改めて見せつけられたことは、分野が異なるとはいえ、地球環境変動研究の意義や緊急性と、我々科学者の責任について再認識させられる機会となった。最後に、今回の震災で甚大な被害を受けた東北地方の大学、研究所の方々にお見舞いを申し上げるとともに、一日も早い復興をお祈りいたします。

以上



図 2：プレナリーセッションの様子 (copy right: Jaime Gómez-Gutiérrez, CICIMAR)

(2) 公募等 一般財団法人キヤノン財団 第3回(2011年)研究助成の募集

1. 研究助成プログラム「産業基盤の創生」

人々の暮らしを支え、人間社会が将来も発展していく基盤となる産業の礎となる研究を助成します。

日本の強い産業を更に強化し、あるいは新たな産業を起こすことによって経済発展を促すような科学技術分野にあつて、独創的、先駆的、萌芽的な研究、例えば、情報・通信、エレクトロニクス、機械・精密、オプティクス・フォトンクス、応用化学、応用物理、ナノテクノロジー・材料などの既存の分野だけでなく、医工連携などの融合分野や新興分野における新たな挑戦的な研究が助成対象です。

日本経済の発展には、地域の活性化が不可欠です。特に地域の活性化に貢献する研究を重点的に支援します。地方に位置する大学等の研究をある一定枠を設けて支援するとともに、中央に位置する大学等の研究で地域の活性化を目指す研究もこの枠内で支援します。

助成金額：1 件あたり助成期間中の研究費 2,000 万円以下、新規採択総額約 2 億円。

助成期間：1 年または 2 年間

2. 研究助成プログラム「理想の追求」

人類の英知を深め、人類の永遠の繁栄を目指す総合的な研究プロジェクトを助成します。

「Frontier、Welfare、Sustainability」の視点から、当財団が設定する課題に熱意をもって果敢に挑戦し、大きなイノベーションを起こすことが期待される、独創的で先駆的な研究プロジェクトに助成します。2011 年募集は、人類にとって身近でありながら未知の部分の多い『海』に関する研究が対象です。

助成金額：1 件あたり助成期間中の研究費 5,000 万円以下、新規採択総額約 1 億円。

助成期間：原則 3 年間

3. 応募資格

国内の大学、大学院（附属機関を含む）、大学共同利用機関、高等専門学校、その他公的研究機関等に勤務し、当該機関で実質的に研究できる方です。

4. 応募期間

産業基盤の創生：2011 年 6 月 1 日から 6 月 30 日

理想の追求：2011 年 6 月 1 日から 7 月 15 日

5. 応募および書類請求

申込書と申請書は、下記の当財団ホームページよりダウンロードにてお願い致します。

<http://www.canon-foundation.jp>

6. 問合せ先及び申請書送付先

〒146 - 8501 東京都大田区下丸子 3-30-2

一般財団法人 キヤノン財団 事務局

電子メールによるお問い合わせは、上記の当財団ホームページの「お問合せ」のサイトから、お願いします。

(1) 2011年度日本海洋学会秋季大会開催通知

2011年度日本海洋学会大会及び付帯行事を以下の予定で開催します。

1. 大会実行委員会

委員長: 柳 哲雄 (九州大学応用力学研究所)
副委員長: 山田真知子 (福岡女子大学)
事務局長: 松野 健 (九州大学応用力学研究所)
事務局: 九州大学応用力学研究所
〒 816-8580 福岡県春日市春日公園 6-1
Phone: 092-583-7731、Fax: 092-583-7735
Eメール: jos2011fall@riam.kyushu-u.ac.jp
ウェブサイト (2011年6月6日(月)開設)
<http://kaiyo-gakkai.riam.kyushu-u.ac.jp/>

2. 日程

大会期日: 2011年9月26日(月)～9月30日(金)
研究発表: 2011年9月27日(火)～9月29日(木)

3. 会場

九州大学筑紫キャンパス
〒 816-8580 福岡県春日市春日公園 6-1
・ JR九州「大野城駅」徒歩 10分
・ 西鉄「白木原駅」徒歩 15分

4. 懇親会

日時: 2011年9月28日(水) 18:00～20:00
場所: ロイヤルチェスター福岡
〒 816-0923 福岡県大野城市雑餉隈(ざっしょのくま)町 3-3-15
Phone: 092-588-6688

5. 大会参加および研究発表申し込みの手順

大会参加資格および研究発表資格は以下のとおりです。

- ・ 大会にはどなたでも参加できますが、大会参加費は会員と非会員で異なります。
- ・ 大会での研究発表は、大会の開催年度に個人としての会員資格(通常会員、学生会員、個人としての賛助会員、名誉会員、特別会員、または終身会員資格)を有する方に限ります。ただし、団体会員または賛助会員である団体に所属する方の場合、1団体につき1名は、個人としての会員資格を有しない方でも発表できるものとします。なお研究発表申込の締め切り日までに学会事務局に入会申込書を提出した個人は、大会での研究発表資格を有するものとします。
- ・ 団体会員または団体としての賛助会員の大会参加については、1団体につき2名までは通常会員と同じ参加費、3人目以降は非会員と同じ参加費になります。

各種申し込みはできる限り大会ウェブサイトにて、次の1)から4)の項目に従って行ってください。

書面による登録を希望する場合は、出来るだけメールアドレスを

記入してください。

1) 大会参加の申し込み

〔受け付け期間: 2011年6月6日(月)～2011年9月9日(金)〕
大会ウェブサイト参照し、指示に従って申し込みをしてください。郵送での申し込みは、本ニュースレター綴じ込みの申し込み用紙に記入の上、事務局まで送ってください。研究発表申し込みを伴わない場合は9月9日(金)必着となります。郵送で研究発表申し込みをされる方は、「参加申し込み用紙」にあわせて「研究発表申込書」「要旨集原稿」「発表内容の抄録」も一括してお送りください(7月7日(木)必着)。

2) 研究発表の申し込み

大会ウェブサイト参照し、指示に従って申し込みをしてください。ウェブサイトでの申し込みができない場合は、本ニュースレター添付の申込書をコピーして必要事項を記入の上、要旨集原稿、発表内容の抄録と一緒に事務局に郵送してください。封筒の表には、「研究発表申し込み」と朱書きしてください。締め切りは、2011年7月7日(木)(必着)です。

3) 要旨集原稿の送付

口頭発表、ポスター発表とも、要旨集原稿の締め切りは、2011年7月7日(木)(必着)です。

研究発表の申し込みの締め切りと同じです。締め切り後の変更は受け付けられません。

a) ウェブサイトから投稿する場合

大会ウェブサイト参照し指示に従って、要旨集原稿を投稿してください。受付期間内なら何度でも投稿でき、その都度新しい版が登録システムに上書きされます。

なお、投稿できるファイルの形式は「PDF」のみとなりますので、ご注意ください。また、投稿するPDFは必ず「PDFセキュリティを設定しない」ようにお願いします。

b) 郵送の場合

締め切りまでに届くように、事務局に郵送してください。封筒の表に「要旨集原稿」と朱書きしてください。なお、ウェブサイトから参加登録された方で、要旨集原稿の送付を「郵送」でご希望の方は、ウェブサイトでの大会参加申込時に発行された参加受付番号を併せて封筒の表に朱書きしてください。

4) 大会参加費、懇親会費、要旨集代金の振り込み

大会参加費、懇親会費、要旨集代金は、2011年9月9日(金)までに前納してください(当日有効)。なお、お支払い方法は以下の3つがあります。

- ・ ウェブサイトでのクレジットカード決済
- ・ 銀行振込決済
- ・ 郵送/FAXによるクレジットカード委託決済

銀行振込をご希望の方は、必ず登録した「ご本人名(フルネーム)のみ」でお振り込みください。(参加受付番号の付与は必要ありません)前納された参加費等は返却いたしません。9月9日(金)を過ぎると前納料金は適用されません。なお、振り込み手数料は振り込み者負担となります。

費目	大会参加費		懇親会費	
	前納	前納期以降	前納	前納期以降
通常会員	2,500	3,500	5,000	6,000
学生会員	1,500	2,500	3,000	4,000
非会員	3,000	4,500	5,000	6,000
名誉会員	無料	無料	無料	無料

(単位：円)

・名誉会員は大会参加費と懇親会費が無料、要旨集は謹じります。

・特別会員と賛助会員(個人)は通常会員と同じ扱いです。要旨集の頒布価格は3,000円です。郵送を希望する場合は、送料等として500円が加算されます。

銀行振込によるお支払いをご希望の方：

本大会では、登録システムの仕様上、ユーザごとに振込口座情報が異なります。各人にEメールまたは書面にて送られてくる振込先口座情報をご参照の上、お振り込みください。

(Eメール登録済みの方)

登録されたEメールへ銀行振込口座情報をご通知いたします。

(Eメール未登録の方)

登録された連絡先へ、後日書面にて銀行振込口座情報を郵送いたします。

5) 要旨集原稿の作成要領

- ・研究の目的、方法、結果、結果の解釈などを、わかりやすく書いてください。
- ・要旨集原稿は『A4版1枚』とし、大会実行委員会はこれを原寸大で印刷します。
- ・本ニュースレター添付の「研究発表要旨原稿作成上の注意」にならって、ワープロで作成してください。カラーは白黒印刷になります。
- ・手書きでの原稿は原則として認めません。どうしても手書きを望む方は、書き直しをお願いする場合がありますので早めに送付してください。
- ・2010年度春季大会から、Webによる講演申込の際、「講演題目」、「講演者」に続いて、「発表内容の抄録」を提出していただくことになっております。日本語の抄録を全角300文字以内(半角英数字は0.5文字扱い、改行は1文字扱い)でご登録ください。英語で書かれた要旨についても、日本人共著者の方等にご協力いただき、出来る限り「日本語」でご登録願います。この「抄録」は、通常の講演要旨とは別に作成していただくもので、JST(科学技術振興機構)が管理する文献データベースに登録されます。

6) 発表形式および制限

- ・研究発表は1会員につき1題に限ります。
- ・会場には、PowerPoint 2010とAdobe Reader XをインストールしたPC(Windows)を用意します。発表に必要なファイルのみを入れたUSBフラッシュメモリーもしくはCD-Rをご用意下さい。各会場受付で動作確認ならびにウイルスチェックを行いますので、早めに各会場受付までお越しください。特殊な機材(OHP等)やアプリケーションソフトの使用を希望する方は、研究発表申し込み時の登録項目「口頭発表での使用機材」の「その他」欄にご入力・記入ください。
- ・発表形式は、「口頭」または「ポスター」のいずれかを選んでください。大会実行委員会では、発表申込者の希望に添うように努

力しますが、プログラム編成上支障のある場合には、発表形式の変更を求めることがあります。

- ・口頭発表の時間は、討論も含めて15分程度の見込みです。
- ・ポスター発表では、会期中に1時間30分程度のポスター会場での立ち会い説明時間を用意します。ポスターの大きさは横90cm×縦120cm程度(≒A0サイズ)です。なお、PowerPoint等による口頭の内容紹介は行いません。

6. シンポジウム

1) 日程等

2011年9月26日(月)と30日(金)を予定しています。申込件数の多い場合は、複数のシンポジウムを並行して行います。また、会場の制約およびプログラムの編成の都合で、一部のシンポジウムの実施を本大会会場以外でお願いすることもあります。

2) 申し込み

2011年度秋季大会シンポジウム(学会共催を含む)の開催を希望する個人または団体・機関は、下記の項目を明記して2011年6月13日(月)必着で大会実行委員会事務局長(下記宛先)に郵送またはEメール(関係者名をファイル名とした添付ファイル)で申し込んでください。締め切り期日を過ぎてからの申し込みは受け付けません。

- ・表題：シンポジウム名称
- ・主催：主催者が、海洋学会の研究会や外部の団体・機関などの場合はその名称を記載してください。会員が主催する場合は、「日本海洋学会」と記載してください。
- ・共催：主催者が外部の団体・機関などの場合は、海洋学会との共催を申請してください。
- ・コンピーナー：氏名と所属を記載してください。
- ・連絡先：シンポジウム開催責任者として事務的な連絡が取れる方の氏名・電話・メールアドレスなどを記載してください。
- ・趣旨：簡潔にシンポジウム開催の趣旨を記載してください。
- ・開催希望日時
- ・必要とする会場の広さ(参加予定者数)

宛先：〒816-8580 福岡県春日市春日公園6-1

九州大学応用力学研究所

2011年度日本海洋学会秋季大会 実行委員会事務局長

Eメール：jos2011fall@riam.kyushu-u.ac.jp

海洋学会幹事会で検討の後、必要に応じてシンポジウム代表者と相談の上、大会実行委員会で日時・会場等を決定します。

3) プログラムと講演要旨の送付

シンポジウム開催責任者は、シンポジウムのプログラムを2011年7月7日(木)までに大会実行委員会事務局長宛送付してください。また、講演要旨を要旨集に掲載する場合は、5.5)の要旨集原稿の作成要領に従って原稿を作成し、シンポジウム開催責任者がとりまとめ、プログラムと併せて大会実行委員会事務局長宛送付してください。

7. 自由集会・ナイトセッション

1) 日程等

9月27日および29日の研究発表終了後、2時間程度の集会を認めます。なお会場の制約およびプログラムの編成の都合で、多数の申し込みがあった場合はお断りする場合がありますことをご了承ください。

2) 申し込み

2011年度秋季大会自由集会・ナイトセッションの開催を希望す

る個人または団体・機関は、下記の項目を明記して2011年6月13日(月)必着で大会実行委員会事務局長に郵送またはEメール(関係者名をファイル名とした添付ファイル)で申し込んでください。締め切り期日を過ぎてからの申し込みは受け付けません。

- ・表題：セッション名称
- ・コンピーナー：氏名と所属を記載してください。
- ・連絡先：自由集会・ナイトセッション開催責任者として事務的な連絡が取れる方の氏名・電話・メールアドレスなどを記載してください。
- ・趣旨：簡潔に集会・ナイトセッション開催の趣旨を記載してください。
- ・開催希望日時
- ・必要とする会場の広さ(参加予定者数)

宛先：〒816-8580 福岡県春日市春日公園6-1

九州大学応用力学研究所

2011年度日本海洋学会秋季大会 実行委員会事務局長

Eメール:jos2011fall@riam.kyushu-u.ac.jp

3) プログラムと講演要旨の送付

自由集会・ナイトセッション開催責任者は、自由集会・ナイトセッションのプログラムを2011年7月7日(木)までに大会実行委員会事務局宛宛送付してください。また、講演要旨を要旨集に掲載する場合は、5.5)の要旨集原稿の作成要領に従って原稿を作成し、自由集会・ナイトセッション開催責任者がとりまとめ、プログラムと併せて大会実行委員会事務局宛宛送付してください。

8. その他

1) 各賞授賞式および受賞記念講演

2011年度春季大会が中止になったため、秋季大会期間中に日本海洋学会賞等各賞授賞式、並びに受賞記念講演を行う予定です。

2) 宿泊

大会実行委員会および事務局では、宿泊の斡旋はいたしません。筑紫キャンパス周辺にはホテルはほとんどありません。博多駅、西鉄福岡(天神)駅周辺にはたくさんのホテルがあります。博多駅からはJRで15分程度、西鉄福岡(天神)駅からは西鉄電車で20分程度です。

3) 主な日程

ウェブサイトの開設・参加登録開始

2011年6月6日(月)

シンポジウムの申し込み

2011年6月13日(月)まで

研究発表の申し込み、および要旨集原稿の送付

2011年7月7日(木)まで

大会参加費・懇親会費の前納

2011年9月9日(金)まで

大会

2011年9月26日(月)～9月30日(金)

(2-1) 議事録等 日本海洋学会 2010年度第6回幹事会 議事録

日時:2011年1月28日

場所:毎日コミュニケーションズマイナビル9F-K

出席者:小池会長、花輪副会長、小川、川合、河宮、岸、才野、田中、濱崎、中野、道田、安田、山尾各幹事、事務局毎日学術フォーラム(出戸、平坂)、岩坂次期幹事、松野 2011年度秋季大会実行委員

議題

1. 議事録(案)確認

2010年度第5回幹事会議事録を確認した。

2. 審議事項

(1) 入退会について(小川幹事)

入退会(2010年10、11月)を承認した。入会1名、退会2名、逝去1名2010年11月末現在会員数1932名。2005年以降会員数が減少傾向であることが報告された。

(2) シンポジウムの後援・協賛等について(小川幹事)

シンポジウム、講演会への後援もしくは協賛4件を承認した。春季大会におけるシンポジウム10件の開催を承認した。

(3) 庶務:募集・推薦等の依頼(報告事項)(小川幹事)

研究助成への推薦依頼等について報告があった。

(4) 海の研究・JO誌紙媒体希望者について(小川幹事)

海の研究・JO誌にかかる個人会員、購読会員、および団体会員の権利について確認した。妥当な理由で希望する者に対して改めて申込書を送付すること及び紙媒体発行手数料を承認した。

(5) 名誉会員の権利に関する幹事会内規および関連細則の改定について(小川幹事)

会則14条及び細則4条から6条の改定案を次期評議員会の議題とすることを承認した。名誉会員候補者の推薦基準幹事会内規(1992年3月12日制定2001年3月9日改正)(5)を関連会則及び細則改正が承認された段階で改正することが承認された。

(6)2010年度決算案・2011年度予算案について(河宮幹事)

2010年度決算案・2011年度予算案を精査し、これを微修正したものを次期評議員会及び総会の議題とすることとした。

(7) その他

春季大会における宇田賞授賞式の時間を承認した。

秋季大会において韓国海洋学会物理分科会との共催シンポジウムの開催可能性及び対応方針について協議を行い、シンポジウム、講演タイトルに日本海に関するその他の呼称が表れないという条件付での共催を承認した。

70周年記念事業について、次年度に「日本海洋学会10年の歩み(仮題)」の担当幹事を置き、これを2012年3月をメドに発行することを承認した。

3. 報告事項

(1) 副会長

日本学術会議における大型研究計画立案の進捗状況及び学会としての対応状況について報告された。

(2) 編集

① JO(才野編集委員長)

JOの論文受付状況、刊行状況について報告があった。特に、9

月7日までに投稿された原稿に対してページチャージがかかること、online firstにはcitationが付かないこと及び、アクセス数、引用論文のリストをリアルタイムで閲覧できること等が報告された。

②海の研究(岸編集委員長)

海の研究の論文受付状況、刊行状況について報告があった。

(3) 研究発表(道田幹事)

2012年秋季大会までの準備状況が報告された。2012年秋季大会の開催場所について次期評議員会における議題となる。

(4) 選挙(中野幹事)

幹事選挙、各賞可否投票、学会賞・岡田賞・宇田賞受賞候補者選考委員、論文賞受賞候補者選考委員及び環境科学賞受賞候補者選考委員会選挙の結果が報告された。

(5) 広報(川合幹事)

JO電子版の購読登録手続き方法が学会HPに掲載されたこと及びウェブサーバの移行状況が報告された。

(6) 教育問題研究会(道田幹事)

研究会則の一部改正が次期評議員会における議題となることが報告された。

(7) 日本地球惑星科学連合(川合幹事)

5月に開催される連合大会への参加登録期間中であること等が報告された。

(8) 海洋環境問題委員会(小川幹事)

来年度から名称が研究会に変わることに伴い、会則の決定及び新会長の選出が次期評議員会における議題となることが報告された。今後は幹事会において、海洋環境問題「委員会」と海洋環境問題「研究会」からそれぞれ別に活動報告が行われる。

(9) 海洋未来技術研究会(道田幹事)

海外渡航援助の手続き状況が報告された。

(10) その他

2012年に開催予定のASLO琵琶湖大会が、同年7月8日から13日に開催されると決まりつつあることが小川幹事から報告された。

次回幹事会:3月14日、毎日コミュニケーションズマイナビルーム9F-Kにて開催予定。

(2-2) 議事録等 日本海洋学会 2010年度第7回幹事会 議事録

日時:2011年3月14日(月) 13:30~

場所:東京海洋大学品川キャンパス2号館200B会議室

出席者:花輪副会長、小川、川合、河宮、島田、田中、中野、中田、2011・12年度幹事会メンバー:津田、久保田、神田、日比谷事務局毎日学術フォーラム(出戸、平坂)

議題

1. 議事録確認

2010年度第6回幹事会の議事録を確認した。

2. 審議事項

(1) 入退会について(小川幹事)

入退会(2010年12月、2011年1月)を承認した。入会9名、退会18名、2011年1月末現在会員数1922名。

(2) シンポジウムの後援・協賛、募集・推薦等の依頼等について(小川幹事)

シンポジウム後援1件について、すでにMLを通じて審議し承認したことが報告された。公募・推薦の依頼3件、シンポジウム・講演等のお知らせ2件、その他案内等について、適宜MLを通じて周知、対処したことが報告された。

(3) 2010年度決算及び2011年度予算案(河宮幹事)

2010年度の決算報告と収支の特徴について説明があり、審議の結果、承認した。引き続き2011年度の予算案が提案され、承認した。

(4) 2012年度秋季大会開催について

2012年度秋季大会を静岡地区会員により静岡市内で開催することを承認した。

(5) 会則、細則の改正について(小川幹事)

会員の被選挙権に関連する細則の条項整理ならびに投稿規定の承認を幹事会でできるようにする会則の条項見直しについて提案され、承認した。

(6) 2011年度青い海の助成事業の申請課題の採否について(中田幹事)

海洋環境問題委員会で行った青い海助成事業事前審査結果が報告され、推薦された2課題を採択した。なお、委員会から、2011年度募集要領では「1件あたり30万円以内で採択数は最大2件まで」となっていたが、採択数の制限をはずし、助成総額が60万円を超えない範囲で助成できるようにしてはどうかとの提案があった。これについては次年度の幹事会で検討することとなった。

(7) 教育問題研究会の会則改正、海洋環境問題研究会の会則制定について(小川幹事)

教育問題研究会から、英語呼称の追加と会の目標の明確化を目的とした会則改正案が呈示され、承認した。

海洋環境問題委員会から①秋の評議員会で呈示した会則案を会則とすること、②研究会の初代会長に鈴木会員が就任すること、が提案され、承認した。

(8) 「航空機観測に関するワーキンググループ」の提案について(小川幹事)

植松会員より幹事会の下に「航空機観測に関するワーキンググループ」を設置することが提案され、審議した。「会則の裏付けが必要」等の意見が出され、継続審議となった。

(10) 会長推薦の幹事について

花輪副会長より、神田会員(東京海洋大学)、杉崎会員(水産総合研究センター)、寄高会員(海洋情報部)を会長推薦の幹事としたいとの提案があり、承認した。

(11) JO編集委員長、編集委員の交代

編集委員長が才野会員から日比谷会員に交代することを承認した。

編集委員会の構成メンバーの一部交代について、千手会員、三寺会員、升本会員、安田会員、市川会員、津田会員、原田会員が退任し、代わって森本会員、島田会員、須賀会員、東塚会員、早稲田会員、根田会員、齋藤会員、小島会員、山本会員が新たに就任することを承認した。

(12) 海の研究編集委員長の交代について

海の研究編集委員長が岸会員から久保田会員に交代することを承認した。

(13) 2011 年度春季大会、評議員会、および総会について

東北関東大震災の発生に際し、2011 年度春季大会の開催について審議した。その結果、懇親会、総会、評議員会を中止し、口頭発表、ポスター発表は要旨発表を持って代えること、受賞記念講演は秋の大会で行うこと等を決定し、HP、ML で会員に周知することとした。シンポジウムについては、大会事務局で会場を確保するが、各シンポジウム主催者に開催の有無を委ねることとなった。なお、参加費や懇親会費等の取扱いについては、改めて幹事会の ML で審議することとなった。

今後の予定について、4 月上旬に評議員会資料を作成して評議員に郵送すること、評議員の意見を集約して 4 月 15 日開催予定の幹事会で総会資料を作成すること、となった。なお、総会の持ち方については幹事会 ML を通じて審議する。

(14) その他

①幹事の役割分担は 4 月 15 日開催予定の幹事会で決定することとなった。

②賞選考委員会について

留任委員の中から幹事会において世話役を選定し、メールベースで委員長、委員の追加等を審議してもらうこととなった。

3. 報告事項

(1) 学会関連報告（花輪副会長）

学術会議の大型研究計画の進捗状況について、花輪副会長より報告された。

(2) 海の研究（編集委員長代理；久保田会員）

論文と総説以外はニュースレターに掲載することになるが、これについて、秋の評議員会で投稿規定を改訂するとの報告があった。

(3) 教育問題研究会

2010 年度活動報告ならびに 2011 年度活動計画案が報告された。地学オリンピック作題者について、教育問題研究会から推薦があり、承認した。

(4) 日本地球惑星科学連合報告（川合会員）

セクションの名称変更に関する議論の経過、総会日程（5 月 22～27 日）、夢ロードマップ等に関する報告があった。

次回幹事会 4 月 15 日

(2-3) 議事録等 2011-2012年度 日本海洋学会役員

会長：花輪 公雄

副会長：津田 敦

監査：今脇 資郎、寺崎 誠

評議員（56 名）：

北海道・東北地区（9 名）

伊藤 進一、江淵 直人、大島 慶一郎、川村 宏、岸 道郎、齋藤 誠一、須賀 利雄、三寺 史夫、見延 庄士郎

関東地区（27 名）

池田 元美、石丸 隆、市川 洋、岩尾 尊徳、岩坂 直人、植松 光夫、小川 浩史、蒲地 政文、蒲生 俊敬、川辺 正樹、河宮 未知生、神田 穰太、木村 伸吾、木暮 一啓、才野 敏郎、高槻 靖、中田 薫、西田 周平、日比谷 紀之、深澤 理郎、古谷 研、松山 優治、水野 恵介、道田 豊、安田 一郎、山形 俊男、吉田 次郎

北陸・東海地区（5 名）

石坂 丞二、加藤 義久、轡田 邦夫、久保田 雅久、田上 英一郎

関西・中国・四国地区（7 名）

秋友 和典、淡路 敏之、磯辺 篤彦、上 真一、金子 新、武岡 英隆、藤原 建紀

西南地区（6 名）

市川 香、小池 勲夫、清野 聡子、平 啓介、松野 健、柳 哲雄

外国地区（2 名）

裘波、謝 尚平

幹事（13 名）：

岩坂 直人（ニュースレター編集）、岡 英太郎（集会・教育問題・ML 担当）、小川 浩史（庶務・海洋環境問題・70 周年記念事業担当）、川合 義美（広報・地球惑星連合）、河宮 未知生（会計・海洋環境問題）、神田 穰太（庶務）、久保田 雅久（海の研究編集）、杉崎 宏也（広報）、島田 浩二（集会・教育問題）、中野 俊也（選挙・研究発表）、浜崎 恒二（選挙・研究発表）、日比谷 紀之（JO 編集）、寄高 博行（会計・連合）

※将来構想担当、海洋未来技術研究会、日本海洋科学振興財団については、津田副会長が担当

（50 音順）

(3) お知らせ Journal of Oceanography 電子投稿・査読システムの導入のお知らせ

2011 年 4 月 1 日より Journal of Oceanography の電子投稿・査読システムの運用を開始いたします。

電子投稿サイトアドレス

<http://www.editorialmanager.com/jooc>

電子投稿・査読システム (Editorial Manager®) 導入後、論文の投稿・査読過程はすべて web 上のシステムで行います。初めて利用する際は、ユーザー登録を行い、論文の投稿手続きを行います。投稿した論文に関する情報は Editorial Manager® にアクセスすれば、どこからでも確認することができるようになります。2011 年 4 月 1 日以降、Journal of Oceanography への投稿は、Editorial Manager® をご利用ください。

なお、システム導入以前（2011年3月31日まで）に投稿された論文については採択/却下の判定が出るまで担当編集委員が引き続き審査を行います。

※新投稿規定は下記サイトをご参照ください。
<http://www.springer.com/journal/10872>

会告

1. 日本海洋学会賞・日本海洋学会岡田賞・日本海洋学会宇田賞受賞候補者の推薦依頼

2012年度日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞受賞候補選考委員会 委員長 今脇 資郎

日本海洋学会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞受賞候補者選考委員会（以下賞候補者選考委員会という）では、これら三賞の2012年度受賞候補者について会員各位からの推薦を受け付けております。下記参考資料をご参照の上、推薦要領に従って、これら三賞にふさわしい会員を積極的にご推薦いただきますよう、お願い申し上げます。なお、宇田賞には、研究グループとしての学術業績ばかりでなく、教育・啓発や研究支援などで海洋学の発展に貢献のあった会員を広くご推薦ください。

各賞候補者の選考に当りましては、会員の皆様からの推薦と賞候補者選考委員会の推薦を併せた中から行うことを申し添えておきます。また、昨年度ご推薦いただいた候補者で、受賞されなかった方々についても、改めてご推薦くださいますようお願い申し上げます。

推薦要領

以下の項目1～6について、A4版用紙1枚に記入し郵送してください。推薦用紙は日本海洋学会のホームページからもダウンロードできます。

1. 候補者の氏名と所属機関（岡田賞の場合は、生年月日も記入してください）
2. 受賞の対象となる研究課題（宇田賞の場合は、受賞の対象となる学術、教育・啓発あるいは研究支援に関する業績）
3. 推薦理由

4. 推薦の対象となる主要論文（宇田賞の場合は省略可）
5. 推薦者の氏名、印、所属機関およびメールアドレス
6. 推薦日付

なお、学会賞・岡田賞受賞候補者に関しては、審査の際の参考とするため、候補者の略歴と業績リストも合わせてお送り頂ければ幸いです。

締切日： 2011年9月2日（金）必着

送付先： 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル2階

毎日学術フォーラム内

日本海洋学会 賞候補者選考委員会

参考資料

日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞細則（抄）

日本海洋学会賞（以下学会賞という）、日本海洋学会岡田賞（以下岡田賞という）および日本海洋学会宇田賞（以下宇田賞という）を本学会に設ける。学会賞は本学会員の中で海洋学において顕著な学術業績を挙げた者の中から、岡田賞は受賞の年度の初めに（4月1日現在）36歳未満の本学会員で、海洋学において顕著な学術業績を挙げた者の中から、宇田賞は顕著な学術業績を挙げた研究グループのリーダー、教育・啓蒙や研究支援において功績のあった者など、海洋学の発展に大きく貢献した本学会員の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。（以下省略）

1-2. 現在までの受賞者

日本海洋学会賞，日本海洋学会岡田賞

年度	学会賞	岡田賞			
1964		國司秀明	1977	西条八束	野崎義行
1965		杉浦吉雄	1978	庄司大太郎	池田勉
1966	宇田道隆	関文威	1979	丸茂隆三	遠藤昌宏
1967	三宅泰雄	土屋瑞樹	1980	宮崎正衛	前田昌調
1968	吉田耕造	上田誠也、安井正、宝来帰一	1981	服部明彦	山形俊男
1969	新野弘	杉村行勇	1982	岡市友利	鈴木款
1970	日高孝次	大森信	1983	大久保明	上真一
1971	市村俊英	岩淵義郎	1984	角皆静男	増田章
1972	元田茂	前田総之助	1985	平野敏行	田辺信介
1973	宇野木早苗	和田英太郎	1986	北野康	川辺正樹
1974	菅原健	川口弘一	1987	川合英夫	植松光夫
1975	梶浦欣二郎	小倉紀雄	1988	T.R.Parsons	白山義久
1976	増沢譲太郎	杉本隆成	1989	鳥羽良明	山本民次、日比谷紀之
			1990	半田暢彦	久保川厚、神田穰太
			1991	根本敬久	秋友和典、石坂丞二

1992	高橋正征	酒井敏、小達恒夫
1993	光易恒	高田秀重、裘波
1994	米田義昭	江淵直人、永田俊
1995	寺本俊彦	三寺史夫、長沼毅
1996	関文威	渡辺豊、大島慶一郎
1997	山形俊男	須賀利雄、中塚武
1998	野崎義行	斎藤宏明、山中康裕
1999	小池勲夫	鈴木利一、升本順夫
2000	花輪公雄	石川輝、藤尾伸三
2001	池田勉	市川香、西川淳
2002	川辺正樹	羽角博康、小畑元
2003	田上英一郎	河宮未知生、小埜恒夫
2004	池田元美	丹羽淑博、李雅利
2005	蒲生俊敬	清水勇吾、西岡純
2006	田口哲	東塚知己、山口篤
2007	岸道郎	中村知裕、町田龍二
2008	日比谷紀之	川合美千代、中野英之
2009	植松光夫	山下洋平、小橋史明
2010	上真一	上野洋路、吉江直樹
2011	安田一郎	伊藤幸彦、岡崎裕典

宇田賞

年度	受賞者
1999	永田豊
2000	竹松正樹
2001	堀部純男, 岩宮浩
2002	坪田博行
2003	青田昌秋
2004	平啓介
2005	鳥羽良明, 谷口旭
2006	James J. O'Brien, 故中井俊介
2007	光易亘
2008	角皆静男, 若土正暁
2009	今脇資郎
2010	宇野木早苗, 紀本岳志
2011	淡路敏之

1-3. Announcement of nominations for research prizes of the Oceanographic Society of Japan

The Oceanographic Society of Japan (JOS) is receiving nominations for three prizes which will be awarded at the 2012 JOS spring meeting to recognize achievements in oceanographic research. Nominees and nominators must be members of JOS.

1. The JOS Prize

The JOS Prize, the Prize of the Oceanographic Society of Japan, is awarded to a member of the Society who has made outstanding contributions to the progress of oceanography. One prize is awarded annually.

2. The Okada Prize

Commemorating the late Professor Takematsu Okada, the Okada Prize is awarded to a young member of the Society who has made outstanding contributions to the progress of oceanography. Up to two prizes are awarded annually.

Eligibility: Members younger than 36 years old on the first of April of the award year (2012).

3. The Uda Prize

Commemorating the late Professor Michitaka Uda, the Uda Prize is awarded to a member of the Society who has contributed notably to the progress in oceanography, by showing remarkable leadership in a research group, or by playing outstanding roles in educational outreach or in technical supports. The prize is awarded annually.

Recommendations must be written in English or Japanese and should include the followings.

1. The nominee's full name, birth date (for the Okada Prize only), and

affiliation

2. The nominee's research subject for the prize

3. Description of the nominee's research achievement

4. List of the nominee's key publications (not required for the Uda Prize)

5. The nominator's full name, affiliation, and e-mail address (signed and dated)

If possible, please attach a short curriculum vitae and a list of publications for each nominee for the JOS Prize and the Okada Prize.

Please mail the recommendation to

Awards Committee of the Oceanographic Society of Japan

Mainichi Academic Forum

Floor-2, Palace-side Building

1-1-1 Hitotsubashi, Chiyoda-ku

Tokyo 100-0003, Japan.

Deadline: September 2, 2011

The winners in the past

	JOS Prize	Okada Prize	Uda Prize
1964		Hideaki Kunishi	1999 Yutaka Nagata
1965		Yoshio Sugiura	2000 Masaki Takematsu
1966	Michitaka Uda	Humitake Seki	2001 Yoshio Horibe, Hiroshi Iwamiya
1967	Yasuo Miyake	Mizuki Tsuchiya	2002 Hiroyuki Tsubota
1968	Kozo Yoshida	Seiya Uyeda, Masashi Yasui, Kiichi Horai	2003 Masaaki Aota
1969	Hiroshi Niino	Yukio Sugimura	2004 Keisuke Taira
1970	Koji Hidaka	Makoto Omori	2005 Yoshiaki Toba, Akira Taniguchi
1971	Shun-ei Ichimura	Yoshio Iwabuchi	2006 James J.O'Brien, late Nakai Toshisuke
1972	Sigeru Motoda	Sonosuke Maeda	2007 Hisashi Mitsuyasu
1973	Sanae Unoki	Eitaro Wada	2008 Shizuo Tsunogai, Masaaki Wakatsuchi
1974	Ken Sugawara	Kouichi Kawaguchi	2009 Shiro Imawaki
1975	Kinjiro Kajiura	Norio Ogura	2010 Sanae Unoki, Takashi Kimoto
1976	Jotaro Masuzawa	Takashige Sugimoto	2011 Toshiyuki Awaji
1977	Yatsuka Saijo	Yoshiyuki Nozaki	
1978	Daitaro Shoji	Tsutomu Ikeda	
1979	Ryuzo Marumo	Masahiro Endoh	
1980	Masamori Miyazaki	Masachika Maeda	
1981	Akihiko Hattori	Toshio Yamagata	
1982	Tomotoshi Okaichi	Yoshimi Suzuki	
1983	Akira Okubo	Shin-Ichi Uye	
1984	Shizuo Tsunogai	Akira Masuda	
1985	Toshiyuki Hirano	Shinsuke Tanabe	
1986	Yasushi Kitano	Masaki Kawabe	
1987	Hideo Kawai	Mitsuo Uematsu	
1988	T. R. Parsons	Yoshihisa Shirayama	
1989	Yoshiaki Toba	Tamiji Yamamoto, Toshiyuki Hibiya	
1990	Nobuhiko Handa	Atsushi Kubokawa, Jota Kanda	
1991	Takahisa Nemoto	Kazunori Akitomo, Joji Ishizaka	
1992	Masayuki Takahashi	Satoshi Sakai, Tsuneo Odate	
1993	Hisashi Mitsuyasu	Hideshige Takada, Qiu Bo	
1994	Yoshiaki Maita	Naoto Ebuchi, Toshi Nagata	
1995	Toshihiko Teramoto	Humio Mitsudera, Takeshi Naganuma	
1996	Humitake Seki	Yutaka Watanabe, Keiichiro Ohshima	
1997	Toshio Yamagata	Toshio Suga, Takeshi Nakatsuka	
1998	Yoshiyuki Nozaki	Hiroaki Saito, Yasuhiro Yamanaka	
1999	Isao Koike	Riichi Suzuki, Yukio Masumoto	
2000	Kimio Hanawa	Akira Ishikawa, Shinzou Fujio	
2001	Tsutomu Ikeda	Kaoru Ichikawa, Jun Nishikawa	
2002	Masaki Kawabe	Hajime Obata, Yasuhiro Hasumi	
2003	Eiichiro Tanoue	Michio Kawamiya, Tsuneo Ono	
2004	Motoyoshi Ikeda	Yoshihiro Niwa, Masatoshi Moku	
2005	Toshitaka Gamo	Yugo Shimizu, Jun Nishioka	
2006	Satoru Taguchi	Tomoki Tozuka, Atsushi Yamaguchi	
2007	Michio Kishi	Tomohiro Nakamura, Ryuji Machida	
2008	Toshiyuki Hibiya	Michiyo Kawai, Hideyuki Nakano	
2009	Mitsuo Uematsu	Youhei Yamashita, Fumiaki Kobashi	
2010	Shin-ichi Uye	Hiromichi Ueno, Naoki Yoshie	
2011	Ichiro Yasuda	Sachihiko Ito, Yusuke Okazaki	

2.日本海洋学会環境科学賞受賞候補者の推薦依頼

2012年度日本海洋学会 環境科学賞受賞候補者選考委員会 委員長 柳 哲雄

日本海洋学会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、日本海洋学会環境科学賞受賞候補者選考委員会（以下賞候補者選考委員会という）では、環境科学賞の2012年度受賞候補者について会員各位からの推薦を受け付けております。環境科学賞の制定の経緯、目的等に関しましては、「海の研究」第18巻第3号、または学会HPに掲載の「日本海洋学会環境科学賞の制定について」をご参照下さい。また、下記の参考資料（会則）もご参照の上、推薦要領に従って、本賞にふさわしい会員を積極的にご推薦いただきますよう、お願い申し上げます。

なお、受賞候補者の選考にあたりましては、会員の皆様からの推薦と賞候補者選考委員会からの推薦を併せた中から行うことを申し添えておきます。また、昨年度ご推薦いただいた候補者で、残念ながら受賞されなかった方々についても、改めてご推薦下さいますようお願い申し上げます。

推薦要領

以下の項目1～6について、A4版用紙1枚に記入し郵送してください。なお、推薦用紙は日本海洋学会のホームページからもダウンロードできます。

1. 候補者の氏名と所属機関・身分（生年月日も記入してください）
2. 受賞の対象となる業績
3. 推薦理由
4. 推薦者の氏名、印および所属機関
5. 推薦の対象となる主要論文（省略可）
6. 推薦日付

締切日：2011年9月2日（金）必着

送付先：〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 2F (株)毎日学術フォーラム内

日本海洋学会 環境科学賞受賞候補者選考委員会

参考資料

日本海洋学会 会則 第6章 表彰

第37条 5. 海洋環境保全に関わる学術研究の発展、啓発および教育に大きく貢献した会員を表彰するため、日本海洋学会環境科学賞を設ける。その規定は細則で定める。

現在までの受賞者

2010年度 清野 聡子

2011年度 梅沢 有

2-2. Announcement of nomination for the Environmental Science Prize of the Oceanographic Society of Japan

The Oceanographic Society of Japan (JOS) is receiving nominations for the JOS Environmental Science Prize which will be awarded at the 2012 JOS spring meeting to recognize achievements in oceanographic research. Nominees and nominators must be members of JOS.

The JOS Environmental Science Prize is awarded to a member of the Society who has made outstanding contributions to the progress of oceanography and/or educational outreach in the identification, analysis and/or solution of marine environmental problems. One prize is awarded annually.

Recommendations must be written in English or Japanese and should include the followings.

1. The nominee's full name, birth date and affiliation
2. Description of the nominee's achievements for the prize
3. List of nominee's key publications (if available)
4. The nominators full name, affiliation and email address (signed and dated)

Please mail the recommendation to

Award Committee of JOS Environmental Science Prize

Mainichi Academic Forum, Floor-2, Palace-side Building

1-1-1 Hitotsubashi, Chiyoda-ku, Tokyo 100-0003, Japan.

Deadline: 2 September, 2011

The winners in the past

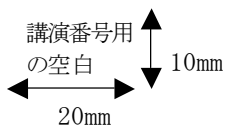
2010 Satoko Seino

2011 Yu Umezawa

2011 年度日本海洋学会秋季大会
大会参加および要旨集申し込み用紙（郵送・FAX 用）
 できるだけウェブサイトで申し込んで下さい

大会： <input type="checkbox"/> 参加 <input type="checkbox"/> 不参加	参加資格： <input type="checkbox"/> 通常会員 <input type="checkbox"/> 学生会員 <input type="checkbox"/> 非会員 <input type="checkbox"/> 名誉会員
懇親会： <input type="checkbox"/> 参加 <input type="checkbox"/> 不参加	要旨集： _____ 部
連絡先： 〒 _____ <input type="checkbox"/> 勤務先 <input type="checkbox"/> 自宅	
氏名： _____	
Tel: _____	FAX: _____ E-mail: _____
<p>【大会参加登録】（名誉会員は大会参加費と懇親会費が無料、要旨集は贈呈といたしますので、ご希望の要旨集部数と送付の要不要のみご記入ください。）</p> <p>1. 大会参加費 <input type="checkbox"/> 通常会員: ¥2,500, <input type="checkbox"/> 学生会員: ¥1,500, <input type="checkbox"/> 非会員: ¥3,000</p> <p>2. 講演要旨集 (1部: ¥3,000) _____部 _____円</p> <p>3. 要旨集送料 (1部: ¥500) _____部 _____円</p> <p>4. 懇親会費 <input type="checkbox"/> 会員: ¥5,000, <input type="checkbox"/> 学生会員: ¥3,000, <input type="checkbox"/> 非会員: ¥5,000</p> <p style="text-align: center;">合 計 _____円</p>	
<p>【お支払い】以下の2通りのいずれかに印を付け、お支払いください。</p> <p><input type="checkbox"/> 1. クレジットカードによるお支払い</p> <p>カード種類：<input type="checkbox"/>VISA <input type="checkbox"/>Master <input type="checkbox"/>JCB</p> <p>カード番号： _____ - _____ - _____ 有効期限： ____ / ____ (MM/YY)</p> <p>カード名義： _____ (カードと同様に記入下さい)</p> <p>(注：クレジットカードによるお支払いは前納のみとなります)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 収納代行業をクレジット決裁代行業者 テレコムクレジット㈱に委託しています。 ◆ クレジットカードの引落とし名は、「Telecom 上記業者カスタマーセンターの電話番号」または「TC 上記業者カスタマーセンターの電話番号」となりますので、予めお含みおきください。 <p><input type="checkbox"/> 2. 銀行振込によるお支払い (注) お手元に届く振込先口座へお振り込みください</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ E-mail を記入されている方：振込口座情報を E-mail へ送信いたします ◆ E-mail を記入されていない方：振込口座情報を書面にて郵送いたします 	
要旨集送付： <input type="checkbox"/> 希望する <input type="checkbox"/> 希望しない 送付希望部数： _____ 部 要旨集送付先： <input type="checkbox"/> 上記連絡先 <input type="checkbox"/> その他	要旨集送付先記入欄： 〒 _____ 様
※「その他」の場合は右記の送付先欄にご記入下さい	

送付先：九州大学応用力学研究所 2011年度日本海洋学会秋季大会 実行委員会事務局
 〒816-8580 福岡県春日市春日公園6-1 Phone: 092-583-7731 ; Fax: 092-583-7735



研究発表要旨原稿作成上の注意

○ 浅海太郎 ・ 深海二郎 ・ 海底 広
 (甲大・理) (乙大・環境研)

キーワード： (例) 太平洋・深海・拡散係数・地形 (優先順に4つまでを記入する)

30mm程度

1. 要旨集原稿

(イ) 内容

研究の目的、方法、結果、結果の解釈などをわかりやすく書いて下さい。

(ロ) ワードプロセッサによる原稿作成

1) ワードプロセッサで記入して下さい。原稿はA4版のまま印刷されます。

2) A4用紙に上部30mm、下部30mm、左20mm、右20mmのマージンで設定して下さい。

3) 研究題目、発表者、所属は、例示に準じて記入し、連名の場合には講演者(ポスターの場合には発表代表者)の左側に丸印を付けて下さい。

4) 左上の講演番号を印刷するスペースは、必ず空けておいて下さい。

5) ヘッダーの氏名、所属の下に、キーワード：として4つまでのキーワード(事象や目的)を優先順位順にならって記入して下さい。

6) 本文は例示にならって2段組で記入して下さい。

(ハ) 用紙

1) 用紙はA4版白色上質紙を使用し、印字は鮮明にお願いします。感熱紙に印字したものは印刷原稿として適当でないので、避けて下さい。

2) 用紙は、口頭発表、ポスターとも1題1枚とします。

(ニ) 図表

1) 図表が必要な場合は、本文枠内に直接記載、または貼り付けて下さい。貼り付ける場合は、シワにならないよう、剥がれないよう注意して下さい。テープの使用は避けて下さい。

2) コピーの図を貼り付ける場合は、汚点をホワイトで消しておいて下さい。そのような処理がなされていない場合、グラフ上の重要な‘点’や図上の‘島嶼’などが、印刷作業の過程で誤って消されてしまうことがあります。

(ホ) 写真

写真の使用はなるべく避けて下さい。やむを得ず使用する場合は、用紙に貼り付けず、写真の裏に題名、氏名、写真番号を記入の上、原稿に添付して下さい。拡大・縮小のご要望には応じかねますので、原稿上原寸大の写真となるよう留意して下さい。

(ヘ) 原稿の送付

原稿を郵送する場合は、しわにならないよう厚紙にはさんで、期日までにお送り下さい。

デジタルファイルで送付する場合は、PDFファイルに変換して送付して下さい。

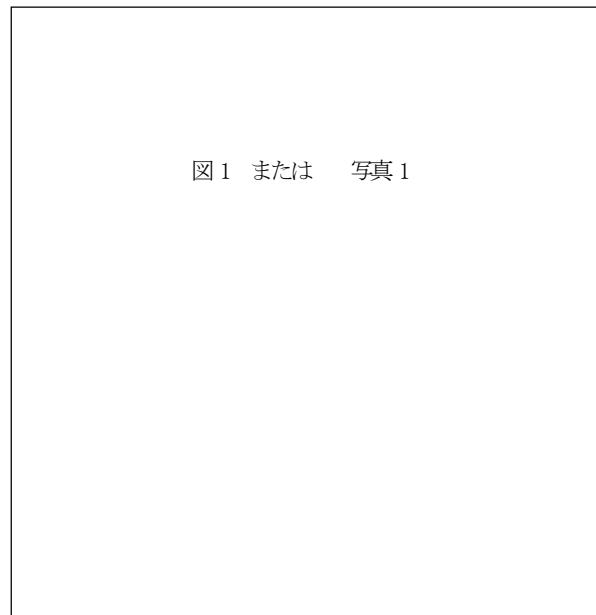


図1 または 写真1

図1 XX海における観測点

この見本は「MS Word」で作成しました。印刷スタイルは下記の通りですので、原稿作成時に目安として下さい。

用紙設定 A4サイズ・縦方向

文字設定

フォント MS明朝

文字サイズ 9ポイント

(タイトルは 16ポイント)

文字数 全角 23文字

マージン

上端 30mm

下端 30mm

左右端 各20mm

ヘッダ・フッタ

上端 開始位置 30mm

段組

2段 段間 2文字

会費納入、入退会、会員資格変更などの手続きについて

1. 会費納入方法

会費の納入は、なるべく銀行口座からの自動引落か、郵便振込でお願いします。

(1) 郵便振込、または銀行口座の自動引落で払う場合

事務局から請求書が届くまでお待ちください。書類紛失等でご入用の場合は、事務局に請求書の再送を依頼してください。

汎用の振込用紙、銀行口座への直接振込は、振込人の情報が明確に伝わりませんので、ご遠慮いただいています。

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル 2F (株) 毎日学術フォーラム内 日本海洋学会事務局

E-mail: jos@mycom.co.jp TEL: 03-6267-4550 FAX: 03-6267-4555

(2) クレジット・カードで払う場合

クレジットカードでも支払うことができますが、学会が負担する手数料が高いため、なるべく郵便振込をご利用ください。

クレジットカード決済のリンクページは学会ホームページをご覧ください。

Username と Password は請求書に印字されています。

2. 入会案内・変更届

(1) 会員の種別と会費

日本海洋学会会則 第2章により、会員は次のように分けられており、会費が異なります。新規に入会される場合は1～4のいずれかになります。会員は、機関誌 Journal of Oceanography と「海の研究」を無料で読むことができます。また、研究発表大会で発表できるほか、参加費等が優遇されます。研究発表大会での発表には、大会の開催年度に個人としての会員資格（通常会員、学生会員、個人としての賛助会員、名誉会員、特別会員、または終身会員資格）が必要ですが、団体会員または賛助会員である団体に所属する方の場合、1団体につき1名は、個人としての会員資格を有しない方でも発表できるものとします。

第6条 本会の会員は海洋学に関心を持ち、本会の趣旨に賛成する者とする。会員を分けて次の7種とする。

1. 通常会員 会費年額金 11,000 円を納める者。ただし年度の初めに満 65 歳以上の者については会費年額金 8,000 円とする。
2. 学生会員 学部学生・大学院学生・研究生で会費年額金 6,000 円を納める者。
3. 団体会員 会費年額金 24,000 円を納める団体。
4. 賛助会員 個人または団体が賛助会費（毎年金 40,000 円以上）を納める者。
5. 名誉会員 本学会の活動に対し特に功労のあった者のうちから総会の決議を受けて推薦された者とする。会費は徴収しない。
6. 特別会員 本学会の活動に対する長年の貢献に敬意を表するため、会員歴 30 年、年齢 68 歳以上の者のうちから評議員会の決議を受けて推薦された者とする。会費は、年額金 3,000 円とする。
7. 終身会員 本学会の活動に対する長年の貢献に敬意を表するため、満 65 歳以上かつ通常会員歴 20 年以上で終身会費金 50,000 円を納付した者、ならびに満 75 歳以上で通常会員歴 20 年以上の者とする。年会費は徴収しない。なお、終身会費は満 60 歳以上で前納することができる。

2004 年 9 月 25 日に 会則が改正され、2005 年度から会費が通常会員は 11,000 円、団体会員は 24,000 円となりました。学生会員・特別会員・賛助会員は変更はありません。また、外国会員は撤廃され、通常会員と学生会員に組み入れられました。

※ 2011 年 5 月 2 日現在の賛助会員

(有) 英和出版印刷社、沿岸海洋調査(株)、独立行政法人 海洋研究開発機構 横浜研究所図書室、(財) 海洋生物環境研究所 ライブラリー、鹿島建設技術研究所地球環境・バイオグループ、(株) 環境総合テクノス 環境部、関西電力(株) 環境室環境技術グループ、原電事業(株)、五洋建設(株)、三洋テクノマリン(株)、いであ株式会社、(株) 鶴見精機、電気事業連合会、(財) 電力中央研究所 環境科学研究所、(株) 東京久栄技術センター、日本海洋(株)、(財) 日本水路協会、(株) 三菱総合研究所 科学・安全政策研究本部、(有) 吉野計器製作所、(株) 離合社、(財) 日本海洋科学振興財団、スリーエス・オーシャンネットワーク(有)、メイワフォーシス(株)

(2) 入会方法

入会希望者は、入会申込書(学会ホームページからダウンロードできます)に必要事項を記入し、学会事務局に郵送してください。学生会員として入会を希望される場合、指導教員の押印と、学生証のコピーの同封が必要です。なお、春季・秋季大会の会場では入会手続きを行っていません。

新規入会者には振り込み用紙が送られてきますので、会費を郵便局でお振り込みください。その後、幹事会で正式に入会が承認されることになります(入会が認められないときは、直接、本人に通知され、会費も返却されますが、入会承認は通常、本人には通知されません)。

申し込みから1～2ヶ月後、海洋学会メーリング・リストに登録されますが、お急ぎの方は、各自で参加の申し込みをしてください。

(3) 資格変更や住所変更などの届け出

学生会員から通常会員への変更や、所属機関の変更、住所変更などは、速やかに届け出るようにお願いします。学会ホームページからダウンロードした会員異動届用紙に必要事項を記入して、学会事務局へ郵送あるいは FAX で送付してください。なお、メールのアドレスが変更になる場合には、メーリング・リストのアドレス変更手続きも行ってください。

(4) 学生会員の資格確認について

2005 年度から学生会員の資格確認を行うこととなりました。学生会員には毎年 1 月に往復葉書にて資格確認書が送られますので、次年度も引き続き学生会員の継続を希望される方は、指導教員の確認印をもらった上で資格確認書を返送ください。締切は 2 月 1 日(消印有効)です。資格確認書の返送がない場合、次年度は自動的に通常会員に変更されます。なお、学会ホームページからダウンロードした確認書を学会事務局宛に郵送していただいても結構です。

(5) 退会について

日本海洋学会を退会される場合、退会されることを書面にて学会事務局に連絡してください(書式は特に定められていません)。なお、未納分の会費は必ずお支払いください。

用紙の送り先・問い合わせ(学会事務局)

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル 2F (株) 毎日学術フォーラム内 日本海洋学会事務局

E-mail: jos@mycom.co.jp TEL: 03-6267-4550 FAX: 03-6267-4555

JOSニュースレター編集委員長就任のご挨拶

岩坂直人(東京海洋大学)

今年度から日本海洋学会ではJOSニュースレターを会員の皆様にお届けすることになり、編集委員長を仰せつかりました。学会として初めての試みであり、また私自身も初めての仕事なので手探り状態で動き出しました。会員からのご要望、ご提案を活かして会員に役立つものに作り上げていきたいと考えておりますので、ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

花輪学会長、久保田海の研究編集委員長の挨拶にもありますように、海の研究が電子ジャーナル化され、論文と総説のみを扱う機関誌として位置付けられたことから、ニュースレターは学会と会員の間での情報交換、共有、提供の場として創設されました。したがって、従来海の研究に掲載されていた学会に関する記事、各種集会などの参加報告、公募情報、書評、寄稿などはニュースレターに引き継がれます。また従来海の研究には掲載されていなかった企画も考えております。たとえば、研究に密接に関連していながら論文にはなりにくい新しい観測技術などの紹介、学会活動を支援くださる賛助会員、海洋未来技術研究会、日本海洋科学振興財団など紹介、海の研究や Journal of Oceanography と連携した研究動向の紹介、学生会員に対する入門的な記事などにも取り組みたいと考えております。

第1号は、東日本大震災およびその後の福島第一原子力発電所事故にともなう放射性物質放出拡散にたいする日本海洋学会の対応についての記事を掲載しました。残念ながらニュースレターは刻々と変わる情勢を即座に取り上げることができず、また掲載できる情報量に限りがありますので、震災対応については学会の震災対応Webサイトが情報共有、提供の機能を中心的に担うことになりました。ニュースレターは第2号以降も震災対応、震災関連の記事を掲載する予定ですが、Webサイトとの連携とすみ分けが課題と考えております。

第1号をご覧になってのご意見などございましたら編集委員長あてにお寄せください。今後ともよろしくお願い申し上げます。



JOS NEWS LETTER

JOS ニュースレター

第1巻第1号 2011年5月15日

編集 JOS 編集委員会

委員長 岩坂直人

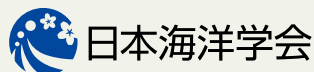
〒135-8533 東京都江東区越中島 2-1-6

東京海洋大学海洋工学部

電話/FAX 03-5245-7395

メール iwasaki@kaiyodai.ac.jp

発行



日本海洋学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 2F

(株) 毎日学術フォーラム内

電話 03-6267-4550 FAX 03-6267-4555

メール jos@mycom.co.jp

デザイン・印刷 株式会社アース

〒103-0002 東京都中央区日本橋馬喰町 1-5-3

陽光日本橋馬喰町ビル 8F

<http://www.ars-design.co.jp/>